

大正六年上半期決算

合名  
會社 鈴木商店調査書

帝國興信所神戸支所

合名  
會社 鈴木商店調査書目次

法人登記		1
沿革及現況		1
本支店出張所〃在地		11
輸出部	(直営)	15
輸入部	(同)	15
内地部	(同)	16
製油業	(同)	18
鈴木商店魚油工場	(同)	19
同 魚油精製工場	(同)	19
同 油房	(同)	19
同 清水製油所	(同)	20
東海製油株式会社	(分身)	20
鈴木商店横濱製油工場建設事務所	(直営)	21
同 鳴尾製油工場(建設中)	(同)	21
同 王子硬化油工場(同)	(同)	22
同 保土ヶ谷硬化油工場(同)	(同)	22
同 清水港第二工場(同)	(同)	22
石油事業	(同)	23
樟腦製造業		
日本商業会社樟腦精製所	(分身)	25
合資会社葺合樟腦精製所	(同)	26
神戸樟腦精製合資会社	(關係)	27
鈴木商店小野濱製腦所	(直営)	28
同 脇ノ濱製腦所	(同)	29
柳田 <sup>りゅうのう</sup> 龍腦製造所	(同)	30
鈴木商店台北樟腦工場	(同)	30
台湾精製樟腦株式会社	(關係)	30
鈴木商店薄荷工場	(直営)	32
同 筒井染料工場	(同)	33

同 岡山精米所	( 同 )	35
同 大里 <sup>だいり</sup> 精米工場	( 同 )	35
大里再製塩工場	( 同 )	36
大里 <sup>しめすい</sup> 酒精及 <sup>しょうちゆう</sup> 焼酎工場	( 同 )	37
鈴木商店神ノ浦 <sup>こうのうら</sup> 炭坑	( 同 )	38
同 桃園農場	( 同 )	39
同 阿喉サイザルヘンプ農場	( 同 )	40
同 香油工場	( 同 )	40
日沙 <sup>にっさ</sup> 商会サラワック農場	( 同 )	40
朝鮮纖維工業所	( 同 )	41
株式会社神戸製鋼所	(分身)	43
日本金属株式会社	( 同 )	48
札幌製粉株式会社	( 同 )	54
株式会社大里製粉所	( 同 )	57
株式会社日本商業会社	( 同 )	61
造船業		
株式会社播磨造船所	(分身)	68
同 鳥羽造船所	( 同 )	74
帝國汽船株式会社	( 同 )	78
備後 <sup>びんごせんき</sup> 船渠株式会社	( 同 )	81
内國砂糖合資会社		
内國砂糖合資会社	(分身)	84
日本輪業合資会社	( 同 )	87
浪華倉庫株式会社	( 同 )	88
大正生命保險株式会社	( 同 )	90
日本酒類釀造株式会社	( 同 )	96
山陽製鐵株式会社	(關係)	100
帝國麥酒株式会社	( 同 )	105
東 <sup>あづま</sup> 工業株式会社	(分身)	109
紡績業		
佐賀紡績株式会社	(關係)	117
天満織物株式会社	( 同 )	123
東洋製糖株式会社		
東洋製糖株式会社	(關係)	128
沖見 <sup>おきみぞめ</sup> 初炭坑株式会社	(分身)	136
株式会社第六十五銀行	(關係)	140
東京毛織株式会社	( 同 )	146

大日本塩業株式会社	( 同 )	153
台湾塩業株式会社	( 同 )	158
東洋燐寸株式会社	( 同 )	161
日本セルロイド人造絹糸株式会社	( 同 )	165
廣島電軌瓦斯株式会社	( 同 )	169
東城製鐵株式会社	( 同 )	173

金融状態		175
結論		182

附								
鈴木商店事業総覧	<table> <tr> <td>直営事業合計</td> <td>二十九</td> </tr> <tr> <td>分身会社合計</td> <td>十九</td> </tr> <tr> <td>関係会社合計</td> <td>十四</td> </tr> </table>	直営事業合計	二十九	分身会社合計	十九	関係会社合計	十四	183
直営事業合計	二十九							
分身会社合計	十九							
関係会社合計	十四							

鈴木商店系統株主名簿		191
------------	--	-----

目次終

## 調査報告書

神戸市東川崎町一丁目一番地

合名会社 鈴木商店

設立 明治三十五年十一月一日

目的 各種商品輸出入製造販売業

資本金 五拾萬円也

社員氏名及其出資額

金 四拾八萬円也	鈴木よね
同 壹萬円也	金子直吉
同 壹萬円也	柳田富士松

沿革及現況（原書 P1～10）

同店は先代岩次郎（原文ママ。正しくは“岩治郎”）氏の創業に係り、栄町三丁目に於て砂糖商を営みしに始まり、爾来堅忍不拔の精神と絶倫の精力とは氏の雄図をして着々実現せしめ来りしが、基礎が未だ鞏固ならざるに明治二十七年、不幸にして遂に不帰の人となり、同店の前途頗る暗澹たるものありしが、未亡人よね女は忠誠なる金子氏の言に聞き、断然亡夫の事業を継続経営することとし、営業一切を挙げて氏に一任せり。

此処に於て乎、同店の興廃実に氏の双肩に懸り、其一举手一投足も決して忽にすべからざるの重大責任を負へり。宜なる哉、天資英邁にして明敏なる氏は神戸市に於ける渺たる一砂糖問屋カネ辰商店をして遂に日本の大実業家神戸鈴木商店の名声を天下に馳せしむるに至れり。

是れ、一に金子氏其他の献身的努力に因るや勿論なりと虽も、一面亦、未亡人よね女の聡明にして女丈夫的資性の然らしむる所以たらずんばあらず。

斯くて、先代の遺図を継ぎて以来、先ず台湾に於ける樟腦事業の発展に努力せり。同店が台湾に本業を興すに至りしは、時の民生長官後藤新平氏と故後藤勝造氏と最も密接なる関係あり。

而して、勝造氏と先代岩次郎（原文ママ。正しくは“岩治郎”）氏とは亦懇親の間柄なりしを以て勝造氏を介して長官後藤氏に接近せしめ、此処に台湾企業を計画せしものなり。

當時は台湾領有後間も無き時代にして、台湾の当局は内地実業家の投資開発を奨励し居りしを以て萬事好都合に進捗せしものと云うべし。

而して、樟腦製造業には幾度か失敗を繰り返し、頗る苦心慘憺たるものありしも、金子氏等が不撓不屈の奮闘は遂に成功の彼岸に達し、本邦唯一の再生樟腦製造の特権を付与せられたる盡く偶然に非ざるべし。

目下台湾及内地に精製樟腦及再生樟腦製造所を数個所に経営し、相当の成績を挙げ居れり。尚、當時は同地にて土木工事の請負業を経営し居りしも、其後廢止せり。

抑々同店が実業界に其存在を認められしは、彼の大里製糖会社を興し之を大日本製糖会社に売渡し巨額の利益を収め、当時其利益の余りに莫大なりしを以て斯界の批評喧囂を極め、或は同店の巧妙を称し、或は之を辛辣なりと貶し、或は日糖重役の不明を嘲笑する等評論区々なりしも、要するに巧妙なりし結果なりと云うの外無し。

此巨利に依りて同店の業礎漸く鞏固を加え、尔来愈々積極的に各種の事業を計画せり。而して、其方針は創設的よりも既設事業の買収方針を採り来れる傾向あり。

盡く之れ企業家にして資本家たる同店の立場として当然執るべき方針なるべしと虽も、其遣り口敏速果敢なる、特に当代随一にして他に多く其類を觀ざるなり。之れ驪て今日の大を致せる素因ならんか。

既設事業は多く経営難に陥りを引受け、之を整理して適材を配置し、内容の充実、業務の拡張を謀り、豊富なる資金と同店の勢力とは、従来微々として振はざりし事業も忽然として隆々たる活況を呈せざるなき。

固より時運の然らしむるものありと虽も、亦以て先見的賢明なる施設の致す処なり。其最も著しき例を挙げれば、製鋼業、毛織業、ビール及酒精釀造業等を始めとし、大正三年欧州戦乱突発以来本邦経済界の大活況を呈するや、疾くも戦時及戦後の大策を定め、染料の輸入困難なるや染料製造業を始め、船舶界の活躍に伴い船舶業及造船業を開始し、播磨船渠会社、鳥羽造船所、備後船渠会社を買収し、尚進んで神戸製鋼所内に造船部を新設する等。

其他亜鉛、銅の製鍊を拡大し、軍需用として岡山及大里に精米所を設け、製粉所の設備を増加し、其他製鉄、炭坑、紡績、燐寸業に指を染むる等算へ来れば殆ど枚挙に遑あらず。

其際漸たる積極主義に至りては一般の世人の賛辞を借まざる所以なり。殊に其工場地の撰定に関しては是亦世人の意表に出るもの少しとせず、門司市外の一漁村たりし大里村をして黒煙濛々たる一大工場地と化せしめ、関門の一孤島彦島をして今日の雄大を致さしめ、其他海面の埋立を為して廉価の土地を得る等。

尚、地理的位置、海陸の便否等に至<sup>しだい</sup>大の注意を払い、意外の地方に意外の事業を計画する等真に大実業家たるの名に背かざるものあり。然れども翻<sup>しか</sup>て其半面<sup>ひるがえつ</sup>に対する世の批難<sup>その</sup>の声を聞しに、如何に聖人君子<sup>いへど</sup>と虽も、時期と場所とに依り往々<sup>よ</sup>悪声を放たるる事あるは古来<sup>その</sup>其例は乏しからず。況<sup>いわん</sup>や俗世間の利害問題に於て於や。

即ち、同店が対外的方面に於て既設事業を買収するに当り、其<sup>その</sup>経営難に乘じ之れを極めて安価に買収し内容を整理して更に増資するを普通とせるが、同店の手に移るや忽<sup>たちま</sup>ち隆々たる盛況を呈し来れるを見て、被買収者は斯く安価に売渡せしは全く辛辣<sup>しんらつ</sup>的<sup>しんらつ</sup>の<sup>しんらつ</sup>圧迫の結果なりとて不平を唱ふる向あり。

又、同店が市場<sup>しゆえい</sup>に輸贏を争い、思惑<sup>おもわく</sup>を為して買占<sup>かいしめ</sup>的行爲に出でんか、豊富なる資力<sup>そのめいびん</sup>と其明敏なる先見<sup>そのめいびん</sup>は往々奇功<sup>おうおうきこう</sup>を奏するを以て小商人<sup>と</sup>圧迫なりと称へ、而も其事業<sup>しか</sup>の何たるを問はず、利益を得るものは敢て辞せざる底<sup>てい</sup>の遣り口は大実業家の態度に非ずと難じ、商品の売渡に際し多少不完全のものありても圧迫的に受取らしめ、反対に同店に引渡すものとして相場の下落せる場合等には、往々<sup>おうおう</sup>口実<sup>くわんじつ</sup>を設けて引取を拒絶する等、多少理由ありとするも苟<sup>いやしく</sup>も日本有数の大実業家の襟度<sup>きんど</sup>と称し難く、況<sup>いわん</sup>や商業道德<sup>いわん</sup>的見地よりすると今少しく反省する処ありたしと評せらる。

是等は素<sup>もと</sup>より幹部<sup>あずか</sup>の与り知らざる所にして当該担任者の行爲ならんも、其<sup>その</sup>対行的關係に於ては大商店の面目を重んじ、大に自重せざる可からざるものあるべし。亦対内的、即ち経営上<sup>また</sup>に<sup>また</sup>関し世人の批難を聞くに、欧乱後余りに各方面に涉り膨大せるを以て一度恐慌の襲来するあらん乎、第一に金融上の大困難を来すべし。第二に極度に拡張せる各製造所は多大の固定資本を投ぜる結果、相当経営困難を訴ふるに至るべし。

而も、各工場共概して本職以外に需要品<sup>おもわく</sup>の思惑<sup>おもわく</sup>売買を為し、往々<sup>おうおう</sup>多額の不急品を買入れ固定せしめ、工場長と経理部長各自に購入注文する等の事珍しからず、之が為め重複購入を為し、固定するものも尠<sup>せんしょう</sup>少にあらざるが如し。

之等は軽々に看過<sup>かんか</sup>すべからざる問題にして、市場の変動に伴い其<sup>その</sup>損益<sup>しだい</sup>に至大の關係を齎<sup>もた</sup>らすべしと。之れ或は一片の杞憂<sup>きゆう</sup>に過ぎざるべきも、亦以て他山の石に値ひすべし。今、同店現今事業の範囲は、勿論北海道、台湾、朝鮮、支那、満州、山東省及南洋方面に亘り、将来は支那、内地の諸事業に指を染めん抱負を抱き居るものの如く。

而<sup>しこう</sup>して、直接、間接及關係会社等の数は実に六十有余に達し、尚計画中のもの拾種内外に及び、之れを本業別に分類すれば

一、貿易業 二、販売業 三、樟腦 薄荷業 四、魚油 大豆油 石油業 五、製粉業 六、製鋼業 七、製鐵業 八、造船 鐵工業 九、製鍊業 十、船舶業 十一、鑛山業、十二、製糖業、十三、製塩業 十四、釀造業、十五、染料業 十六、纖維工業 十七、化学工業 十八、燐寸業 十九、紡績業、二十、精米業、二十一、倉庫業、二十二、保険業、二十三、織物業、二十四、電燈電軌業 二十五、セルロイド工業 二十六、銀行業 二十七、農林業 二十八、瓦斯業等にして、就中貿易販売業等は勿論、樟腦・薄荷業、魚油・大豆油業、製鋼業、造船業、製鍊業、製糖業等は相当の根柢を有し良好の成績を示し居れるも、其他大部分は最新の経営に属し、前途が如何なる結果を齎すべきやは、一に経済界の盛衰如何と経営の良否に依り定まるものなれば、戦争以来急激に拡張膨大せる同店は之等最近の事業に向て多大の努力を致し、依て以て平時戦争に対する根柢の確立を期せざるべからざる可し。

本支店所在地左の如し（原書 P11～14）

本店 神戸市東川崎町一丁目一番地

#### 支店

東京支店	東京市日本橋区小網町二丁目鰲河岸五二号地 五三号地
大阪支店	大阪市南区末吉橋通二丁目三番地
下関支店	下関市観音崎町五番地ノ一
函館支店	北海道函館区仲濱町一二番地
小樽支店	同 小樽区堺町三二番地
旭川支店	同 旭川区二條通六丁目右十號
臺灣支店	臺北廳大加蚋堡大稻埕北門口街二〇六番戸
京城支店	朝鮮京城本町二丁目九二番地
上海支店	上海エドワード七世路第六號

#### 出張所

横浜出張所	横浜市本町四丁目
名古屋 同	名古屋市西区下園町二丁目一五番戸
鹿児島 同	鹿児島市汐見町四五番地
臺南 同	臺南白金町三丁目六一六番地
大連 同	大連市北伊町十九號地
哈爾濱 同	哈爾濱モスコワ市街
青島 同	青島北京町二七號
香港 同	香港皇后街德補路七號
漢口 同	漢口英租界洞庭街第一三號
倫敦 同	倫敦ミンシングレーン二九番
紐育 同	米国紐育ブロードウエー二二〇番
浦塩スウェット 同	浦塩スウェットランスカヤ町五番
ペテログラード 同	露国ペテログラード市日本領事館内



## 出張員事務所

門司出張員	門司市棧橋通
宮崎 同	宮崎県宮崎町
福岡 同	福岡市中土居町
嘉義 <sup>カギ</sup> 同	嘉義北門外一六〇番地
打狗 <sup>ターカウ</sup> 同	打狗新濱街
基隆 <sup>キールン</sup> 同	基隆街後藤組支店内
釜山 <sup>フサン</sup> 同	朝鮮釜山府本町二丁目
仁川 <sup>ジンセン</sup> 同	同 仁川府本町二丁目四番地
鎮南浦 <sup>チンナンポ</sup> 同	同 鎮南浦三和町四丁目
長春 <sup>チョウシュン</sup> 同	満州長春城内権太商店内
済南 <sup>サイナン</sup> 同	山東省済南二馬路小緯大路
シヤトル 同	米国シヤトル ウオッシュコルマン建築物四百號
馬尼刺 <sup>マニラ</sup> 同	マニラ バラザゴイテイ サンタクルーズホテル内
甲谷陀 <sup>カルカッタ</sup> 同	印度カルカッタ横濱 <sup>しやうきん</sup> 正金銀行内
新加坡 <sup>シンガポール</sup> 同	シンガポール海軍病院内
ヴァルパライソ 同	智利バルパライソ ダブルユー アールクレーヌ商会内
那覇 <sup>ナハ</sup> 同	琉球那覇区西本町四丁目
遠軽 <sup>えんがる</sup> 同	北海道北見国湧別遠軽
佐呂澗 <sup>さろま</sup> 同	同 佐呂澗武士市街地
野付牛 <sup>のつけうし</sup> 同	同 野付牛市街地

## 輸出部（原書 P15）

同部は欧州戦乱後非常の活躍を示し、普通需要品の<sup>ほか</sup>外軍需品の注文<sup>おびただ</sup>夥しき多額に達し、昨五年度の輸出総額壹億五千萬円を下らざりし模様にして、従て其利益に至りては的確の数字を得ざるも、優に壹千萬円内外に達せしやの説真に近きが如し。

六年度に入りては<sup>れんごう</sup>聯合各国の<sup>しやし</sup>奢侈品禁輸及露国為替禁止等の為め、相当減退するは止むを得ざるべし。而して、主なる輸出先の割合は欧米約五割、支那二割五分、露国、濠州、印度にて約二割五分の比例にして主要品目を挙げれば左の如し。

銅、亜鉛、樟腦、魚油、大豆油、製粉、薄荷、砂糖、綿糸、綿布、澱粉、米、硫黄、茶箱、<sup>しんちゆう</sup>鎮鏹、<sup>すず</sup>錫、<sup>アンチモニー</sup>安質母尼、<sup>りゅうきんアンモニー</sup>硫酸安母尼、ビール、燐子（原文ママ。正しくは“燐寸”<sup>マツチ</sup>か）等なり。

### 輸入部（原書 P15～16）

同部は欧州戦の結果、<sup>わんごう</sup>聯合国の生産力減退及船腹不足等の為め相当の影響を蒙り、<sup>その</sup>其額約六千萬円内外に達せり共、主要品は鉄材五千萬円内外、原料糖五百萬円内外、<sup>チリ</sup>智利硝石三百萬円内外、雜貨貳百萬円内外にして<sup>そのた</sup>其他大豆及び大豆粕等あるも、大豆は自家用原料にして豆粕は比較的<sup>きんしょう</sup>僅少なり。

### 内地部（原書 P16～17）

同部は主として大豆、大豆粕、小麦、製粉、澱粉、綿糸布、硫安、米、雜穀、外米、諸肥料、鋳産品、藥品類、鉄材、塩、樟腦、薄荷、砂糖、木材<sup>そのた</sup>其他にして<sup>その</sup>其額非常の多額に達し、遣り口多く投機的なるを以て利益も莫大なる半面に、損失も決して<sup>すくな</sup>少からざるものあり。

欧州戦後漸次物価騰貴し、財界非常の活況を呈するや、益々積極的の方針を採り、豊富なる資力を確して縦横に市場を蹂躪する果敢なる遣口に至りては、当業者の等しく畏敬するところなれり。

<sup>けだし</sup>蓋、比思惑的売買より得たる利益は莫大なるものなるべきも、<sup>ほか</sup>計数を得るは困難なり。右の外内外各支店、出張所に於て直接輸出入を為すもの相当の額に達するも<sup>つまびら</sup>詳かならず。尤も輸出入は共に信用状に依り取引し、内地売買亦多く之に関係せるを以て総額參億萬円（原文ママ。正しくは“參億円”か）内外の多額に達するも、之れが運転資本としては約五百萬円内外に過ぎざるべき乎。

### 殖民地製塩の一手販売（原書 P17～18）

製塩業は關係会社たる台湾塩業、大日本塩業兩社の<sup>ほか</sup>外、大里再製塩工場等の製品を一手に販売し居りしが本年七月、<sup>かね</sup>予て計画中の朝鮮總督府官營に係る製塩の販売権全部を有するに至り、既に大蔵当局と契約成立せり。

<sup>これにより</sup>依之同店は満鮮及台湾産製塩の一手販売を為すこととなり、一ヶ年の産額台湾一億六千萬斤、関東州一億三千万斤、朝鮮五千萬斤、合計三億三四千萬斤に達し、<sup>この</sup>此代価約七百五六拾萬円となり、<sup>もとより</sup>元売捌手数料は五分なるを以て、全部を元売捌のみとするも一ヶ年に於る手数料參拾八萬円内外に達せり。

<sup>しか</sup>而も、需要家直接の数も決して<sup>せんしょう</sup>鮮少にあらざる模様にして、<sup>か</sup>斯く直接販売は利益一割迄の限度に於て任意に販売し得るを以て、<sup>この</sup>此分の利益亦相当の額に達すべし。

### 製油事業（原書 P18～19）

同店の製油事業は魚油精製、同硬化油及び大豆油、同硬化油、落花生油、石油等にして現在作業工場五ヶ所、準備及設計中のもの六七ヶ所あり。<sup>しこう</sup>而して、既設投下固定資本參百余萬円、運転資本壹千萬円内外、年産額貳千參四百萬円に達せり。

但、現在の設備は需要の如何に依り、何れも倍額に拡張し得る計画にして、尚目下準備中及設計中のもの全部完成の暁は現在の二倍及至三倍の生産額に達し、一朝有事の場合、全能率を發揮せば優に今日の四五倍に相当する生産額に達し得べしと云う。同各工場に就き略記すれば概要左記の通りなりとす。

#### 鈴木商店魚油工場（原書 P19）

工場所在地 神戸市兵庫西尻池村下箆  
年産額 貳拾萬箱  
此代金 壹百參四十萬円内外  
投下資本額 五拾萬円内外

#### 同 魚油精製工場（原書 P19）

同上 神戸市兵庫西尻池村東浜  
同上 四千五百屯内外  
同上 壹百七拾萬円内外  
同上 七拾萬円内外

#### 鈴木油房（原書 P19～20）

工場所在地 大連市外寺兒溝  
年産額 豆油 六千屯 豆粕 四万五千屯  
此代金 六百五拾萬円内外  
投下資本額 七拾萬円内外

#### 鈴木商店清水製油所（原書 P20）

同上 静岡県清水港  
同上 豆油 一万二百五十屯 豆粕 八万二千五百屯  
同上 壹千百六拾萬円内外  
同上 壹百萬円内外

#### 東海製油株式会社（原書 P20～21）

同上 名古屋市  
同上 豆油 二千屯内外 豆粕 壹万五千屯内外  
同上 貳百貳拾萬円内外  
同上 貳拾萬円内外

#### 製油業総計

年産額 豆粕 十四萬二千屯 豆油 壹万八千二百五十屯  
此価額 貳千四百萬円内外  
投下資本金（固定資本） 參百拾萬円内外  
運転資本総額 壹千萬円内外（原料半）

以上は現在作業中のものにして、尚目下建設着手及計画中のものを挙ぐれば左の如し。

#### 鈴木商店横濱製油工場（大豆）（原書 P21）

本年末<sup>しゅんこう</sup>竣功の予定なるが、生産力は大連工場と同一にして一日百五拾屯の計画なり。  
但し、<sup>きゅうよう</sup>急要の際は拡張倍加することを得る設計なりと云ふ。

#### 鈴木商店鳴尾製油工場（大豆及落花油）（原書 P21～22）

約二ヶ年間の予定にて、生産力は横濱、大連工場と同様にして、一日の製造能力、大豆百五十屯、落花生五十屯の設計なり。<sup>ただし</sup>但、<sup>きゅうよう</sup>急要に応じて横浜工場の如く倍額まで拡張し得べき計画にて、近々起工の<sup>はず</sup>筈なりと云ふ。

#### 鈴木商店王子硬化油工場（原書 P22）

東京府下王子大豆硬化油製造工場

#### 同 保土ヶ谷硬化油工場（原書 P22）

神奈川県保土ヶ谷大豆硬化油製造工場

#### 同 静岡県清水港第二工場（大豆硬化油製造）（原書 P22～23）

同店は<sup>さき</sup>曩に魚油硬化に於て成功せしを以て、今回大豆油の硬化を開始することとし、先づ東京府下王子工場を本年末迄に<sup>しゅんせい</sup>竣成せしめ、来春早々試験製造を開始し、<sup>その</sup>其結果を俟って保土ヶ谷及清水港第二工場に着手する<sup>はず</sup>筈にして、当分の間は前記三ヶ所の硬化油工場にて横浜及清水工場の豆油一日約六千屯を硬化し、将来は清水第二工場にて全部硬化せしむる方針にして、清水二場にては将来水素瓦斯を製造し、之を硬化剤として用い、副産物酸素瓦斯は一般工業用に販売するものなりと。

尚、王子及保土ヶ谷に硬化油工場を設置せり、之れ同地付近に於ては廃品水素瓦斯を安価に買入れ得るの便利あるを以てなりと。

#### 東海製油株式会社（名古屋市）（原書 P23）

同社は今回鈴木商店が名古屋特製豆粕会社を貳拾萬円にて買収し、最近資本金五拾万円を以て創立し、東海道一円に雄飛する目論見にて、将来は生産力を相当増額する計画なりと云ふ。

#### 石油事業（原書 P23～24）

在<sup>えちご</sup>越後、東北石油及北寶石油組合の事業を貳拾萬円にて買収し、更に同付近にて一大石油事業を經營すべく目下種々の精査中なるものの如く、尚敦賀若くは新潟方面に大豆油工場を設置するやの<sup>いこう</sup>意嚮ある由なるも、未だ具体的に進捗せざるものの如し。

## 樟腦及薄荷製造業（原書 P25）

樟腦製造業は明治<sup>さんじゅう</sup>廿五六年頃、男爵後藤新平氏が台湾總督府民生長官たりし当時、鈴木商店が同地にて樟腦製造に指を染めたるに始まり、<sup>じらい</sup>尔来樟腦、<sup>りゅうのう</sup>龍腦及原料樟腦製造を經營せるものにして本邦樟腦生産額は鈴木系統<sup>そのた</sup>其他を通じ約四百萬斤内外に達し、之を需要方面より見るときは内地二十萬斤内外、<sup>いんど</sup>印度百四拾萬斤内外、米国及<sup>かなだ</sup>加奈陀百萬斤内外、欧州諸国百四拾萬斤内外を示せり。

内鈴木商店側に於て製造に係るもの約二百八拾萬斤に達し、<sup>そのた</sup>其他再生樟腦、龍腦、薄荷油等の全部に対し約五百六拾萬円の投資額に達せり。

左に各工場に就き略述すべし

### 樟腦製造

製造所 日本商業会社樟腦精製所（原書 P25～26）  
神戸市葺合雲井通五丁目三十九番地  
固定資本 七萬円内外  
年産額 貳百萬斤内外  
此価額 參百七拾萬円内外

### 沿革 現況

同工場は<sup>にじゅう</sup>廿余年前、住友家の創設に係り經營し来りしが、収支常に<sup>あいつぐな</sup>相償はざりしに依り去る明治<sup>さんじゅう</sup>廿六年、之を鈴木商店に譲り渡したるものにて、<sup>じらい</sup>尔来同店は藤田助八（原文ママ。正しくは“助七”）氏名義に依り經營し同四十二年二月、株式会社日本商業会社を設立し、同社の經營に属せしめたるもの也。

年産額二百萬<sup>ないし</sup>乃至二百五拾萬斤にして、販路は内地向拾五萬斤内外、<sup>いんど</sup>印度向拾萬斤内外、<sup>ほか</sup>外は全部欧米向輸出品なり。目下男女工九十名内外を使用し居れり。

製造所 合資会社<sup>ふきあい</sup>葺合樟腦精製所（原書 P26～27）

神戸市葺合<sup>おのえ</sup>小野柄通三丁目

投資額 資本金七萬円也 払込済  
年産額 參拾萬斤  
此価額 五拾萬円内外

### 沿革及現況

同社は明治四十四年三月、資本金拾萬五千円を以て英国人エス・イー・ルカス、畠山作四郎、船井長治、藤野久吉等によりて設立せられたるものなるが、成績<sup>とにかく</sup>兎角面白からざりしを以て大正二年、遂に鈴木商店の手に<sup>まか</sup>委せられたるものなり。<sup>じらい</sup>尔来同店にては之が整理を為し、資本金を七萬円に減少し經營<sup>おおい</sup>大に努めし結果、漸次収益を見るに至れり。年産額參拾萬斤内外にして販路は<sup>いんど</sup>印度向小型物を主とし、目下男女工百貳拾名内外を使用し居れり。

製造所 神戸樟脳精製合資会社（原書 P27～28）

神戸市八雲通六丁目七番地

投資額 資本金四萬円 払込済

年産額 四五拾萬斤

此価額 八拾萬円内外

#### 沿革及現状

同社は明治<sup>さんじゅう</sup> 卅五年、現社長落合午太郎氏及故後藤勝造氏に依りて設立せられしものなるが、経営難の爲め大正元年頃、後藤氏は自己の持分を鈴木商店に譲り退社するに及び、尔来<sup>じらい</sup>常に同店の融通を受け、表向落合氏及後藤鉄次郎、田辺良吉の三氏の出資社員なるも、内実鈴木商店の経営たりと云ふ。年産額五拾萬斤、販路は欧米、<sup>インド</sup>印度方面にして目下男女工九拾名内外を使用せり。

#### 再製樟脳製造（原書 P28～30）

製造所 鈴木商店小野濱製脳所

神戸市旭通四丁目

製造所 鈴木商店<sup>わきのほま</sup>脇濱製脳所

神戸市脇濱一丁目

固定資本 貳拾萬円内外

年産額 貳百五拾萬斤<sup>ないし</sup>乃至參百萬斤

此価額 貳百萬円<sup>ないし</sup>乃至貳百五拾萬円内外

前記両所共、再製を専門とせり。由来再製業は後藤男爵が民営長官たりし当時、特に同店にのみ特許せられしものにして、現に本邦に於ける唯一の樟脳再製業者なり。

<sup>しこう</sup>而して、再製は樟脳生油を以て原料となし、粗製樟脳を製造するものなり。生油は内地産及台湾産のものにして、同業が如何に有利なるかは其<sup>その</sup>独占的事業たる事なりとす。

因みに、<sup>わきのほま</sup>脇濱製脳所は新式の機械設備<sup>ほどこ</sup>を施し、拾數萬円を投じ将来益々拡張する計画なり。但、去八月火災に罹り全部焼失の厄<sup>やく</sup>に遇ひ、目下之が復旧工事に多忙を極め居れり。

#### 柳田<sup>りゅうのう</sup>龍脳製造所（原書 P30）

同所は市内<sup>わきのほま</sup>脇濱一丁目に工場を設置し、主として薬用及化粧品原料用樟脳を精製し、年産額拾五萬円内外に達せり。

#### 鈴木商店台北樟脳工場（原書 P30）

大正三年頃の開業にして、台北廳古亭村庄一四四番戸に工場を設置し、<sup>おもてむき</sup>表向台湾塩業会社の経営なるも、事実鈴木商店の経営なり。投下資本數萬円、年産額精製樟脳拾萬斤<sup>ないし</sup>乃至拾五萬斤内外なり。

臺北精製樟腦株式会社（原文ママ。正しくは“臺灣精製樟腦株式会社”）（原書 P30～32）

設立 大正六年八月

目的 樟腦製造販売業

資本金 壹百萬円也（払込 貳拾五萬円也）

#### 重役の氏名

常務取締役 飯沼剛一（三井側） 同 平高寅次郎（原文ママ。正しくは“寅太郎”）（鈴木側）

取締役 羽鳥精一（三井側） 同 山崎市太郎（ 〃 ）

同 竹内虎雄（鈴木側） 同 園田太郎（ 〃 ）

監査役 加地利夫（三井側） 同 北尾直樹（鈴木側）

#### 沿革及現況

同社は従来台湾より三井物産会社の手を経て粗製樟腦を海外に輸出し居りしも、精製品として輸出する方遙かに有利なるを以て、今回三井物産会社及鈴木商店合同にて将来台湾樟腦の大部分を精製する計画にて、年産額貳百萬斤内外の予定なり。而して、工場は台北三板橋大竹園芳讓社西隣に土地を買収し、既に工事に着手し居れり。

#### 薄荷製造業

鈴木商店薄荷工場（原書 P32～33）

製造所 神戸市磯上通四丁目

固定資本 拾萬円内外

年産額 五拾萬斤

此代価 二百萬円内外

#### 沿革

同業は明治三十五年頃の創業に係り、主として欧米方面の輸出にして北海道及三備地方を原産地とす。製品は薄荷腦五割、同油五割位の割合にて、時価前者は百斤に付七百円内外、後者は貳百円内外なり。而して、原油は目下参百五六拾円を唱え居れり。

元来薄荷は価格の騰落甚敷、一面危険性を帯びるも、他面亦興味ある事業なり。故に小資産家は之に依りて破産し、或は巨富を贏ち得ること敢て珍らしからずと云ふ。

尚、同店の前記樟腦、薄荷事業に投資せる金額及年産額、約左記の通りなり。

年産額 壹千百萬円内外

固定資本 六拾五萬円内外

運転資本 五百萬円内外

## 染料製造業

鈴木商店筒井染料工場（原書 P33～35）

製造所 神戸市八雲通一丁目

投資額 拾萬円内外

年産額 六萬斤

此価格 四拾萬内外

## 沿革

同業は欧州戦乱以来染料の輸入杜絶し、尔来斯界は空前の活躍を呈し、市価拾倍乃至数拾倍に達し、一躍巨萬の染料成金を輩出せる状況となり、従って新たに同品製造を計画するもの甚多く、政府亦之れの進歩発達に努力せり。

同店は逸早く斯業に着目し、市内八雲通一丁目に製造工場を設置し、資本約拾萬円を投じ只管完成に努力せし結果、相当優良の製品を市場に供給するに至れり。目下製品の種類は酸性染料に於て赤、黄、茶、オレンジ等、塩基性染料にては紫、茶等にして一ヶ月約五千斤内外の生産力を有し、一斤平均八円位のものなりと。

而して、酸性染料原料は自家経営の製油会社製品其他魚油会社等に仰ぎ、苛性曹達、ベンゾール等は輸入品を使用せり。販路は大阪、京都、名古屋、東京方面の同業者なり。

## 精米業（原書 P35～36）

鈴木商店岡山精米所

同 大里精米工場

精米業は大正三年欧州戦乱勃発以来、軍需食料用として本邦精米の需要頓に増加し、多額の入注あるに至れるを以て、福岡県大里町及岡山市網濱町の二ヶ所に精米所を設置し、両所にて一昼夜五百屯位の精米を為し、約七八拾萬円の運転資本を投じて経営し居り相当利益を計上せしも、欧米各国共輸入禁輸若くは制限せし結果、入注皆無の状態となり、遂に大正六年に入り一事業を中止するに至れり。

## 大里再製塩工場（原書 P36～37）

工場 福岡県大里町

固定資本 六萬円内外

年産額 二千萬斤内外

此価額 五拾萬円内外

運転資本 拾五萬円内外



本業は明治四十三四年頃の開業にして、原料は関東州及台湾兩地の天日塩<sup>てんびじお</sup>を以てし、之を再製して純白の上等塩となすものにして、最初生産額九百八拾萬斤位なりしが、品質良好にして一般の需要逐次激増し来れるを以て、大正二年拡張して貳千萬斤に生産力を増加し、内地は九州、四国、山陰、山陽、北海道等、海外は露領沿海州方面に売行旺盛なり。

大里酒精及焼酎醸造工場（原書 P37～38）

工場 福岡県大里町  
固定資本 参拾萬円内外  
年産額 酒精 壹万五千石  
焼酎 四万五千石  
此価額 五百萬円内外  
運転資本 七拾萬円内外

沿革 現況

本業は大正三年一月の開設に係り、資本金参拾萬円を以て酒精の醸造を開始し、最新式と称せらるる「イルゲス」式蒸溜器<sup>か</sup>を輸入し、且つ醸造試験所<sup>しゅせい</sup>を併置し、尚技術師を欧米に派遣し斬新なる学理<sup>ざんしん</sup>を応用し、日夜研究の傍ら醸造に努力せしかば、優良なる製品を産出するに至り、声価頓に揚がり、優秀品として歓迎されつつありし独逸品<sup>ドイツ</sup>を凌駕し、遂に同品を満鮮地方より駆逐するに至れり。

尚、同年六月より焼酎醸造をも兼営することとなり、之又頗る好成績<sup>これまたすこぶ</sup>を呈せり。現今一ヶ年、酒精一萬五千石、焼酎四萬五千石を醸造し、価格比較的低廉なるを以て、内地は勿論満鮮方面に迄盛んに販売し居れり。

鈴木商店神ノ浦炭坑口（原書 P38）

同炭坑は福岡県嘉穂郡穂波村字南尾に在りて、元寺田篤政氏経営なりしを昨五年、鈴木商店の手に買収せしものにして、目下僅々<sup>きんきん</sup>一日壹萬貳千斤内外の産出に過ぎず、全部自家用に供し居れるものの如し。

鈴木商店桃園農場（原書 P39～41）

所在地 台湾桃園廳中壢老街

同農場は面積約参千甲歩にして昨年来より約二千甲歩の試作を為し、一方製糖業の出願中なるも未だ認可に接せず。為めに進んで積極的施設<sup>ちゆうちよく</sup>を躊躇し、只管其認可<sup>ひたすらその</sup>を待ち居れるものの如し。

由来桃園廳下の土質は赭土にして甘蔗栽植には最も不適當にて、現に本島に於て去る明治三十五年、始めて甘蔗奨励に着手して以来十有六年間、現今の盛況を見るに至るまで、何人も敢て顧みる所無かりしを以て見るも、同地が甘蔗の栽培に不適當なるかを証するに足るのみならず、先年某氏が同地に甘蔗栽培を試み大失敗を招きたる実例あり。

然るに、今次同店が斯る土地に糖廊を設けんとするは、素より諸種の研究を試みたる結果確信する所ありしに基づくものならんも、此種酸性土壤の利用に就ては前年来総督府の仔細に調査せる所にして其試験成績に徴するも、之が利用を試みんには先ず充分の科学的研究を積みたる後にあらざれば、或は第二の某氏たるに終る無き哉を虞ると評せられつつあり。

#### 同 阿喉サイサルヘンプ農場（原書 P40）

所在地 台湾阿喉廳枋寮文廳大响管庄

同農場は尙三年来サイサルヘンプ（原文ママ。正しくは“サイザルヘンプ”か）、即ち台湾麻の栽植を試み居るも、未だ具体的計画発表の運びに至らざる模様なり。

#### 同 香油農場（原書 P40）

所在地 台湾南投廳捕里社五城堡

同農場も近来試作を開始せしに止まり、未だ具体的に記載すべき程度に達し居らざる模様なり。

#### 日沙商会サラワック農場（原書 P40～41）

所在地 印度ボルネオ島クーチン

サマラハン護謨園

同 七哩園

本農場は元依岡省輔氏実兄の経営なりし護謨栽培事業にして、四年前鈴木商店の経営に移りしものなり。投資額約四拾萬円に達し、サマラハン園は面積二千エーカーにして植付員数約二十万本を算し、明七年度より毎年二万本位宛護謨を採取し、着手後十ヶ年位にして投資額全部を回収し、尔後は単に経費を支出するのみにして、他は悉く純益となる計算なるが如し。

七哩園はサマラハン園より七哩の位置にあるを以て七哩園と命名せしものにして其面積僅かに百エーカーに過ぎず、且つ未だ採取までに至らずと云ふ。蓋し、同地護謨園は前途益々有望なるものなりと聞く。

## 朝鮮纖維工業所（原書 P41～42）

本業は元朝鮮唯一のバルブ製造家、寺田篤政氏の経営にして、一兩年以来資金の融通を為し居りしが、昨五年鈴木商店の手に移り、<sup>じらい</sup>尔来設備を拡張し新式機械を据付け、一ヶ月百噸位の予定にて専ら品質の優良に努力しつつあり。

原産地は黄海道載寧江付近の芦田約四里平方貸下<sup>かしきげ</sup>の認可を受け、原料豊富なるを以て益々有望と目され、<sup>きんらい</sup>近来漸く製品を市場に出すに至れるも、未だ試験的時代を過ぎざるを以て具体的の取引を見るに至らず。

<sup>はだ</sup>蓋し、品質は<sup>よき</sup>予期に近き成績を挙げつつありと。

<sup>しこう</sup>而して、総投資額は貳拾萬円乃至參拾萬円の予算なりと云ふ。

## 分身会社

鈴木商店分身会社は表向法人組織なるも、<sup>その</sup>其内容に於ては単に名称を異にせる直営会社に過ぎず、従て会社幹部も全部鈴木商店の使用人にして、経営上総てに亘り同店の指揮を受くるものなり。

順次各社の内容を略記すべし

## 株式会社神戸製鋼所 神戸市<sup>わきのほま</sup>脇濱一丁目三十一番地（原書 P43～48）

設立 明治四十四年七月

目的 <sup>ちゆうこう</sup> 鑄鋼、<sup>たんこう</sup> 鍛鋼、船舶及び工業、<sup>その</sup> 鋌山用諸機械類並に兵器の製造、艦艇及船舶の建造、  
其他付屬事業

資本 金五百萬円也 払込金 參百貳拾萬円也

投資額 金五百萬円内外

重役の氏名左の如し

取締役社長 鈴木岩次郎（原文ママ。正しくは“岩治郎”）

専務取締役 田宮嘉右エ門（原文ママ。正しくは“嘉右衛門”）

取締役 <sup>よりおか</sup> 依岡省輔 取締役 森田葆光

監査役 伯爵 吉井幸蔵 監査役 柳田富士松

## 会社の沿革及現況

同社は元東京の小林清一郎氏の経営たりしを明治三十八年、鈴木商店之を譲り受け、<sup>じらい</sup>尔来同店製鋼部として経営し来り明治四十四年、現組織に変更し資本金を壹百四拾萬円とし、大正六年三月更に五百萬円に増資せしものにして、同店の経営に移りし以来非常の苦心と努力により漸次好況を呈し来れり。

製品は主として船体、汽機、汽罐<sup>きかん</sup>、艦船用、工業用、鉱山用諸機械、兵器、艦艇、船舶の建造にして、近年世上に重要視せらるるに至れり。

大正三年、欧州戦乱突発以来鋼材、機械類の輸入困難となるや需要激増し、昼夜兼行にて日も尚足らざる盛況を呈しつつあり、業況<sup>わざ</sup>斯の如くなるを以て従来の設備にては到底一般の需要に応ずる能<sup>あた</sup>はざるより、茲に大拡張を為すこととなり、更に工場数百坪を新築し、溶解炉、灼熱炉、クレーン、ローリングミル等の各機械を増設し、丸角鋼棒及セクションものを不日市場に供給する設備を完成せり。

尚、三百キロ変電所、分析所等の新築及第七工場を増築し、海面埋立工事は六年上半期末には全工事の七分二厘成功し、着々進行しつつあり。

尚、同所は予て造船計画に着手し、脇濱<sup>わきのほま</sup>埋立地に於て一萬屯級以下、大小五個の船台を設備し、近々完成の見込みなり。又、本邦紡績業の著しき発展に伴ひ紡機<sup>ぼうき</sup>の需要多数なるも、海外注文の困難なる現状に鑑み、大々的製作を為さん計画を樹て過般<sup>たかはんらい</sup>来調査中なりしが、愈々<sup>いよいよ</sup>製作に着手せる模様なり。以て先見的施設に努力せるを見るべし。

如<sup>かくのごとく</sup>斯、同所は絶へず時代の要求に投ずべき計画に怠らざる結果、多々益々注文激増し、既に明年中の作業工程を有し、加ふるに船台の新設備と二千屯水圧鍛造機<sup>たんぞう</sup>の完成を告ぐるの<sup>あかつき</sup>暁は生産力著しく増大し、従て営業状態は前途一層良好となるに至るべし。

今六年度上半期決算に於て壹百五十參萬余円の純益を挙げ、払込資本に対し年拾割弱の好成績を挙げ居れり。以て、其<sup>その</sup>一斑<sup>いっばん</sup>を推知<sup>すいち</sup>し得べし。

蓋<sup>はだ</sup>し、同所は鈴木商店分身会社中の重要事業にして総投資額約壹千萬円に達し、将来益々拡大すべき計画なり。

因みに、大正六年度上半期決算左の通り

(単位：円)

資 産 之 部		負 債 之 部	
未払込株金	1,800,000.00	株金	5,000,000.00
土地家屋	926,181.53	法定積立金	97,500.00
機械器具備品	1,573,706.82	別途積立金	80,500.00
倉庫品	1,363,607.22	減価償却積立金	366,500.00
半製品	1,749,259.26	所員機工 同上	65,491.95
埋立工事仮払金	607,178.42	仮受金	47,850.75
仮出金	1,224,581.22	掛買金	108,131.79
掛売金	595,954.67	支払手形	4,507,839.23
受取手形	1,369,284.61	前期繰越金	18,659.58
有価証券	10,551.75	当期利益金	1,535,038.34
振替貯金	2,806.64		
当座預金	601,573.95		
正 貨	2,825.55		
合 計	11,827,511.64	合 計	11,827,511.64

利益金之分配案

金 百五拾参萬五千参拾八円参拾四銭 当期利益金  
 〃 壹萬八千六百五拾九円五拾八銭 前期繰越金  
 合計 金 壹百五拾五萬参千六百九拾七円九拾貳銭

内訳

金 八拾八萬円也 所有物減価償却積立金  
 金 五萬円也 法定積立金  
 金 貳萬円也 別途積立金  
 金 拾壹萬五千円也 普通株主配当金 (年一割)  
 金 四拾六萬円也 特別 同 (年四割)  
 金 壹萬円也 所員慰勞金  
 金 壹萬八千六百九拾七円九十貳銭也 後期繰越金

日本金属株式会社 神戸市東川崎町一丁目 (原書 P48~54)

設立 大正五年五月

目的 冶<sup>や</sup>金及採<sup>ま</sup>鉱又は之に係せる化学工業

資本金 壹百萬円也 払込済

投資額 壹千六百萬円内外

重役の氏名左の如し

取締役	西川文蔵	取締役	村橋素吉
同	阿部元松	同	土屋新兵衛
同	服部馬太郎	監査役	宮本政次郎
監査役	濱田正稲		

会社の沿革 現況

同社は鈴木商店の製錬、冶金事業を統括せるものにして、神戸製鋼所と共に同店主要事業の一たり。欧州戦乱突発後、銅、亜鉛の輻輳し価格著るしく暴騰するや、益々事業の拡張、生産額の増加を図り大正五年一月、資本金壹百萬円払込済の株式会社を組織し、左記各所に製錬所及鉱山を所有し、進んで合金事業をも経営する計画にて、目下福岡県大里に工場設置準備中なり。

製錬所々在地

神戸（神戸市）	日比（岡山県）	彦島（下関市外）
徳山（山口県）	大里（門司市外）	

鉱山事務所

大弘（岡山県）	紀州（和歌山県）	宮古（磐手県）
金辰（朝鮮）	日山（福島県）	畑（福岡県）
江與味（岡山県）	春日（鹿児島県）	甕島（鹿児島県）
高濱（長崎県）	但馬粘土山（兵庫県）	赤松（兵庫県）
小城試錐場（佐賀県）		

撰鉱所 朝鮮京城市外及仁川

亜鉛原鉱は鈴木商店に於て南支、南洋、濠州方面より買入れ、其他は中支那及内地で買入れ。尚、所有鉱山より採掘に係るものを使用し、現今一ヶ年左の生産額を有せり。

種類	数量
電気銅	七千噸
亜鉛	壹万八千噸
錫	二万四千斤
鉛	四千噸
銀	壹千二百貫
鉄屑	壹千貳百噸

前記の如く同社の鉱山品は亜鉛及銅を主産品とし、他は従たる産物に過ぎず。  
 而して、亜鉛は彦島精錬所にて、銅は日比製錬所にて、神戸及大里製錬所は主として支那  
 厘銭銅を製錬せしも、厘銭は既に中止せり。

徳山製錬所は亜鉛原鉱<sup>ふんしょう</sup>焚焼所なり。彦島精錬所は現今、年産壹萬八千吨位なるも、目下  
 拡張計画中なるを以て、完成の上は約貳萬五千屯位の産額に達すべし。

大正六年上半期第一回営業成績を見るに、純益壹百參拾貳萬余円にして払込資本に対し拾參  
 割余の利益なるも、固定資本に六百萬円、運転資金約壹千萬円、合計壹千五六百萬円を投じ  
 居れり。

尚、同社の最近決算表左の如し

(単位：円)

資 産 之 部		負 債 之 部	
土地建物	4,231,958.82	資本金	1,000,000.00
機械什器船舶	1,687,300.08	借入金	15,405,765.90
工事仮払金	267,835.31	支払手形	1,500,000.00
仮払金	152,161.20	職員職工預金	23,688.82
未収入金	9,045.17	仮受金	301,403.60
貯蔵品	1,203,088.69	未払金	601,621.16
原料半製品及製品	12,183,325.80	当期純益金	1,326,274.95
銀行預金	409,590.06		
現金	14,449.30		
合計	20,158,754.43	合計	20,158,754.43

#### 損益計算

金 百三拾二万六千二百七拾四円九拾五銭也

内

金 壹百萬円也 建物築造物償却損失金

差引

金 三拾貳萬六千貳百七拾四円九十五銭 当期純益金

分配

金 六萬六千円也 法定積立金

金 拾萬円也 配当準備積立金

金 拾萬円也 配当金 (年一割)  
〃 六萬〇貳百七拾四円九拾五銭 後期繰越金

札幌製粉株式会社 北海道札幌区五條西七丁目 (原書 P54~56)

設立 明治三十五年  
目的 小麦粉及製麵製造販売業  
資本金 貳拾五萬円也 払込済  
投資額 参拾萬円内外

重役氏名左の如し

専務取締役 村上重章 取締役 谷 治三郎 (原文ママ。正しくは“治之助”)  
取締役 高橋半助 監査役 西岡貞次郎 (原文ママ。正しくは“貞太郎”)  
監査役 小松楠彌

沿革 現況

同社は元北海道、後藤善七 (原文ママ。正しくは“半七”) 氏の個人経営なりしも、失敗の結果、明治<sup>さんじゅう</sup> 卅 五年頃、資本金拾萬円の株式組織に変更せしも、支配人の背任、且社金費消<sup>かつひしゅう</sup> 事件等のため益々<sup>きゅうきょう</sup> 窮 境に陥り同四十二年、鈴木商店が七萬貳千円内外にて買収し、次で資本金を貳拾五萬円に増資し、今日に至れり。

製品は北海道全島へ供給せる目的にて生産額一日四百バーレル、一ヶ月壺万二千バーレル位にて副業に製麵を兼営し一日三百箱、一ヶ年壺万箱位に達せるも、每期好成绩と云ひ難く。

本年上半期末決算左の如し

(単位：円)

資 産 之 部		負 債 之 部	
不動産	85,382.03	資本金	250,000.00
諸機械	89,986.83	減価償却積立	26,721.57
予備品什器	7,316.52	支払手形	215,000.00
原料製品	50,033.25	仮受金	.50
小樽工場予備金	150,000.00	預り金	517.35
売掛金	14,335.65	未払金	11,297.34
代理店勘定	72,260.94	当期利益金	11,104.49
受取手形	6,631.00		
経理部	7,028.11		
製麵部	18,239.49		
当座預金	11,607.24		
金銀	1,819.98		
合計金	514,641.25	合計金	514,641.25



## 利益金処分

一. 金 壹萬壹千百〇四円四拾九銭 当期純益金

内

一. 金 壹萬千百〇四円拾九銭 機械減価償却積立金

株式会社大里製粉所 門司市外大黒町（原文ママ。正しくは“大里町”）（原書 P57～61）

設立 明治四十四年十月

目的 製粉及製麵業

資本金 六拾萬円 払込済

投資額 八拾萬円内外

重役の氏名左の如し

専務取締役	谷 治之助	取締役	柳田富士松
取締役	宮本政次郎	同	森 衆郎
監査役	西岡貞太郎	監査役	小松楠彌

## 会社の沿革 現況

同社は明治三十五年頃英領香港にて英国人が製粉業を經營し居りしも、同地方の空気は湿気多きを以て製品優良ならず、遂に失敗に終りしを鈴木商店にて約拾余萬円にて買収し、現大里町に工場を設け、機械設備一切を移転し同四十四年、資本六拾萬円の株式会社に組織を変更し、益々発展に務め来りしも、本邦製粉界は米國品と競争の爲め絶へて不振の状態にありしが、欧州戦乱突発以来は米國は東洋を顧みるの<sup>いとま</sup>違なきに至り、且つ露國及英仏伊等の注文相当<sup>ふくそう</sup>輻輳し来りし結果、空前の活躍を呈し、殊に支那方面の需要激増は益々市価の暴騰を來し、現今<sup>しがい</sup>斯界は殆んど投機化し来れり。

同所も大勢に<sup>ともなわ</sup>伴れ好成績を示し来りしが、偶々大正四年四月、階下電気室より火を<sup>しつ</sup>失し、工場、倉庫全部烏有に歸し火災保険金にて補填せるも、尚損害約拾貳萬余円に達せしが、營業初年度よりは繰越利益金を以て補填し、直に復旧工事に着手し、前五層樓工場を六層樓となし、機械は最新式英米折衷式二十二台及付属器機を据付け、五年六月<sup>しゅんせい</sup>竣成を告げ、七月より操業し一昼夜壹千五百バーレル、即ち六千袋の生産を有せり。

尚、本年末迄に設備拡張の計画にて完成の上は生産力倍加し、參千バーレル、壹萬貳千袋に達する計算なり。大正五年五月より同六年四月迄一ヶ年の營業成績は純益拾七萬円余を計上し、諸積立金、繰越金を加除し、年二割の配当を為せり。

即ち、決算左の如し

(単位：円)

資 産 之 部		負 債 之 部	
土地建物機械	704,357.36	株金	600,000.00
什器及備品	11,366.69	支払手形	1,195,584.64
原料及製品	1,229,776.20	社員積立金	1,065.15
貯蔵工場用品	119,140.55	保証金	300.00
受取手形	6,400.00	未払金	10,491.05
未収入金	545.69	預り金	84,003.89
銀行預金	30,851.03	買掛及売掛金	13,857.54
現金在高	1,558.47	仮勘定	998.65
		前期繰越金	24,375.98
		当期純益金	173,319.09
合計	2,203,995.99	合計	2,203,995.99

#### 利益金処分案

金 拾七万三千三百拾九円〇九銭 当期純益金

金 貳万四千三百七拾五円九拾八銭 前期繰越金

合計 金 拾九萬七千六百九拾五円〇七銭也

内

一. 金 貳萬円也 法定積立金

一. 金 貳萬円也 別途積立金

一. 金 拾貳萬円也 配当金（年二割）

金 参萬七千六百九拾五円〇七銭 後期繰越金

#### 備考

決算面、純益拾七萬余円なるも、貳拾五萬円は建物機械償却費として損失に計上し居るを以て、実際の純益は四拾貳萬円に達せるものなり。

以て、其好成績なりしを窺知し得べし。

株式会社日本商業会社 大阪市南区末吉橋通二丁目（原書 P61～67）

設立 明治四十二年

目的 一般商品の輸出入、売買代理及仲次業

資本金 五拾萬円也 半額払込

重役左の如し

取締役	西岡貞太郎	取締役	森 衆郎
同	井原五兵衛	同	井田亦吉
監査役	高倍権太郎	監査役	倉敷定次郎
支配人	竹村房吉		

経過及内容

会社は去る明治四十二年二月、鈴木商店の別働隊とも称すべき直輸出入機関として設立され、表向株式会社の形式に依るも、内容同商店の一部隊にして重役等も同店々員とも称すべき関係を有し、標榜資本以外必要に応じて本部より供給を受け、業務の大綱は総て本店総務、金子直吉氏によりて統べ、従て其内容に就ては容易に其真相を確め難し。

営業状態

輸出扱品は多様に属し、金物、肥料、製油原料等を主とし、輸入は棉花、綿糸、布毛原料を主とす。

創業以来常に消長を免れず、殊に大正元年以来二三年は一般財界の不況時に静岡地方の製油業者に多大の固定あり。其外当市宮城商店に対する金物取引に失敗を招致したる等、其他会社が既往に於ける業績は概して失敗の痕跡多かりき。

然れども、大商店を背景とし取引振亦相応敏活にして居常思惑的取引を常とするを以て、一面営業振冒險的にして利害の消長多し。

然るに、大正三年以降時局発生後、業界の活躍時に際し同社は輸出入に力を致し、輸入品の値上りに依る利益蓋し鮮少ならざりしが、尔後同社の経営は著しく冒險の度を加え、大正五年度船腹不足輸入難の結果、扱品の減少を免れざるを以て同年支那方面に対する綿糸布取引に力を注ぎ、同社が大正五年末迄に相応の利益を収めたり。

是等は直接仕向地輸出を目的とするも長期の先物売買を試み、値合の利鞘を目的とする所謂市中売買に力を注げる傾向あり。近時同社の方針は大体に於て投機的思惑取引を主張するの概あり。

然るに、大正六年春以降、綿糸布界稀有の活躍時に同社が市中売買の先鋒として活動し、収益少なからざりし模様なりしが、同年八月下旬より市価の大暴落に会し、一先以降一三限り四銘及雜綿糸の買玉約三万以上、三銘綿布の買玉二万俵以上を算し、平均綿糸の買付単価四百二拾円見当、三銘十一二円見当の高値を標準とする抱擁玉あり。

刻下の市価より打算して深甚の苦痛たるは論を俟たず。然れば、同社の今後如何なる成行を以て買玉の消化を為すべきか頗る注意を要する問題にして、更に一般斯界の大勢は既に前途の反発力少なき結果として拗拗しく商売行はれず、同社も徒に買玉を擁して成行を觀望せる状態にして、若し市価が現今以上に低落する場合は同社の為に由々しき大事に至るべきか。然れば、同社が標榜資本僅かに五拾萬圓の一小会社にして、其取引極めて膨大なるものあり。

一朝局面展開を為す場合は頗る寒心に堪へざるものありと虽も、従来同社は前述の如く鈴木商店との関係上会社が萬一の場合、鈴木商店の信用上何等かの措置を講ぜざるべからざる徳義上の問題あるも、近時巷説によれば、同社刻下の状態に処して鈴木商店側は責任迴避を漏せしとか。

是れ、或は市場の一巷説に過ぎざるべきも、要は同社の成否は今俄かに推断するを得ず。今後、市場の成行きに俟たざるべからざるものと觀ぜざる。目下店員二十名内外を使用し、支配人竹村房吉氏万般を担任し、年商尚高標準立ち難し。

大正六年上半期決算左の如し

(単位：円)

資 産 之 部		負 債 之 部	
未払株金	250,000.00	資本金	500,000.00
樟腦製造業勘定	70,000.00	支払手形	1,328,043.71
土地及建物	46,154.49	外国為替未払	186,346.16
什器	4,368.34	前期繰越利益金	206,776.64
商品及委託品	1,716,889.68	当期利益金	161,072.15
受取手形	36,509.75		
掛売金	89,745.49		
仮出金	20,269.08		
預入信認金	6,900.00		
有価証券	36,647.50		
銀行預金及現金	104,754.33		
合計	2,382,238.66	合計	2,382,238.66

損益計算

金 拾八萬九千四百拾壹圓五拾五錢	当期總收入
同 貳萬八千三百三九圓四拾錢	同 總支出
差引 金 拾六萬千〇七拾貳圓拾五錢也	總益金

金 貳拾萬六千七百七拾六円六拾四銭也                      前期繰越金  
合計 金 參拾六萬七千八百四拾八円七拾九銭也              後期繰越金

### 造船業（原書 P67～68）

欧州戦乱後、軍需品輸送用其他戦過（原文ママ。正しくは“戦禍”か）破損沈没等の為め世界的船腹不足を訴へ、為に海運界は未曾有の活躍を呈し、同時に造船業の殷賑は之亦空前の活況を見るに至れり。

炯眼なる同店は早くも斯界の将来に着眼し、其第一歩として大正四年十二月播磨造船所を勢力圏内に入れ、次で昨五年十二月鳥羽造船所を、本年 月 船渠株式会社を買収し、尚神戸製鋼所に造船部を設置し、本年末迄には設備完成の予定なるが、前記三造船所も鈴木商店の経営に移りし以来、資本を増加し規模の拡張を図り、各完成の暁は本邦有数の一大造船所たるに至るべし。

而して、之に要する投資額は現下約貳百萬円内外にして、将来は約壹千萬円内外の予定なるが如し。

以下、各造船所に就き順次略記すべし

### 株式会社播磨造船所 兵庫県赤穂郡相生町（原書 P68～74）

設立 明治四十一年  
目的 造船諸機械製造及一般鉄工業並に船舶業  
資本金 五拾萬円也 払込 參拾七萬五千円也

#### 重役の氏名

取締役会長	松田茂太郎	専務取締役	辻 湊
取締役	西村和平	取締役	松田万太郎
監査役	坪田十郎		

#### 会社の沿革 現況

同所は明治四十一年、県下赤穂郡相生町付近の有志相謀り小規模の造船所を創設し、越えて四十四年、高橋為久氏が同港の位置、水深共に造船所設置に好適し、而も優に一萬屯以上の汽船を容るるに足るを以て、之を拡張せば一大造船所と為し得べきものなるを看取し、茲に前記造船所を買収し次で四拾五年六月、資本金五拾萬円に増資し、高橋氏社長となり経営の衝に当りしが、当時海運界は非常の沈衰期になりしかば、従て造船業も不振にして同所も連年欠損の状態に陥り、経営頗る困難なりき。

然るに、鈴木商店に於ては欧州戦乱以来海運界の活躍に着目し、適當の造船所物色中、前記播磨造船所長高橋氏より資金融通の交渉を受け、渡りに船と直ちに約六十萬円を融通し、一方株主として約八千株を所有するに至る。

此所に全く実権は同店の掌握する所となり昨五年七月、重役を更迭して同店の経営に移せり。尔来設備を拡張して一万噸級迄の船台を五基と為し、専ら世需の急に應じつあり。

而して、同社経営後は獨逸の無制限潜航艇戰の為め船舶の撃沈せらるるもの夥しく、従て聯合國側は船腹激減し、其結果本邦に其供給を仰ぐこととなり、自然各造船所は到底注文に應ずる能はざるの状況を呈し、遂に各造船主は造船契約成立の上は之を権利として他に転売し、多額の収益を見る状態となれり。

従て、一般に造船所の利益も多大となり、殆ど船価の四割は純益として計上し得るが如き好況を呈せり。収益如斯なるを以て、従来欠損に欠損を重ねし同社も業績一変し、六年上半期決算に於ては前期繰越損失拾萬貳千余円を補填し、尚且つ七拾參萬六千余円、即ち囊込資本に対し年三十九割二分と云ふ大利益を計上するに至れり。

以て、同店の先見の当れる將に称揚に値すべきが、過般船舶管理令發布以来、海運界は沈衰状態に陥り、全然思惑的仲介売買及造船注文等の取引行はれざると一面鉄材の供給意の如くならざる結果、造船業者中には維持困難のものも往々傳へらるる所なるも、同所は来年六月頃迄の材料を抱擁し、且造船契約も明年四月頃迄契約済となり居り、現在に於て解約等の問題も起り居らざる状態なれば、差当りの苦痛は感ぜざるもの如く、且つ同所は飽迄強氣の意見を持し居るを以て、現下の沈衰状態に対し比較的樂觀し居れり。

目下建造中のもの総噸数三千噸級二隻、千式百噸級一隻にして、来春二月頃進水する予定なりと。

尚、同所の本年上半期決算左の如し

(単位：円)

資 産 之 部		負 債 之 部	
未払込株金	125,000.00	資本金	500,000.00
振替貯金	208.84	借入金	36,423.79
受取手形	305,000.00	支払手形	2,539,835.36
仮払金	1,944,917.02	割引手形	305,000.00
製修勘定	1,734,709.34	未払金	737,587.96
未収入金	256.24	仮受金	438,247.71
土地	97,282.36	職工職員積立金	2,185.82
家屋構築物	109,962.95	銀行勘定	14,893.64
船渠	95,759.34	当期利益金	839,150.95
船舶	17,857.21		
機械	124,710.82		
工具	50,474.06		
什器	4,927.07		
貯蔵品	690,794.86		
工場拡張工事費	8,521.34		
現金	264.16		
出張所勘定	95.53		
前期繰越損失金	102,584.07		
合計	5,413,325.23	合計	5,413,325.23

利益金処分

金 八拾参萬九千百五拾円九拾五銭	当期利益金
同 拾萬貳千五百八拾四円〇七銭	前期繰越損失金
差引 金 七拾参萬六千五百六拾六円八拾八銭	当期純益金

内 金 五萬円也	準備積立金
” 拾萬円也	機械建物減価償却積立金
” 壹萬円也	職員退職恩給基金 同
” 七千円也	役員賞与金
” 六萬七千五百円也	株主配当金 (年四割三分強)
” 五拾萬貳千六拾六円八拾八銭	後期繰越金

株式会社鳥羽造船所 三重県志摩郡鳥羽町（原書 P74～78）

設立 大正五年十二月<sup>にじゅう</sup>廿一日

目的 船舶製造並に諸機械及電気事業

資本金 五拾萬円也 払込額 拾貳萬五千円也

#### 重役の氏名

取締役 辻<sup>みなと</sup> 湊 取締役 高橋半助

同 松尾忠二郎 同 谷本貞幸

監査役 松島 誠

#### 会社の沿革 現況

同社は元名古屋市所在株式会社中央鉄工所（原文ママ。正しくは“四日市鉄工所および中央鉄工所”）の業務の一部たりしを昨五年十二月、鈴木商店に買取経営せるものなり。

<sup>しこう</sup>而して、中央鉄工所は名古屋市の有力家、齋藤恒三、井上茂兵衛、伊藤栄治郎及三重県大里峻三郎、伊藤傳七諸氏に依り大正元年十一月、資本金五拾萬円（払込額<sup>にじゅう</sup>廿萬円）を以て設立せられ、諸機械の製造、仲次、販売、船舶製造、修理、電気、瓦斯の供給、土木建築請負等を目的とし、名古屋市に本店を、四日市及鳥羽の両所に支店を置き、鳥羽支店にては造船所及電気事業を経営し来り、業績遅々として振はず経営上<sup>すこぶ</sup>頗る苦心を為し、止む無く鳥羽造船所及電気事業を相当価格を以て売渡さん意向なりしが、遂に昨五年十二月、鈴木商店へ拾九萬円を以て譲渡したるものなり。

同店は更に八萬円内外を投じて設備を拡張し、同所が地理的位置に於て横須賀、神戸の中央に<sup>くわい</sup>位し、且伊勢湾が太平洋方面に於ける中部海軍策源地として好適の素質を備へ居る關係上将来は大々の設備を設し、以て有力なる造船所たらしめん計画なるが如し。

六年上半期は鈴木商店経営後に於ける第一回の決算にして、本期間修繕船<sup>にゅうきよ</sup>の入渠せしもの七艘、此噸数千七百拾貳噸余に過ぎず。

<sup>けだ</sup>蓋し、創立日尚少く、加<sup>しかのみならず</sup>之本期の半<sup>なかば</sup>は諸般の準備に時日を費やし、工程日数僅々三ヶ月に過ぎざりしも、造船界は大活躍の高潮期なるを以て予期以上の好成績挙げ、純益拾參萬貳千余円を計上せり。以て、前途の業績を推知するに難からざるなり。



六年度第一回決算左の通<sup>とおり</sup>

(単位：円)

資 産 之 部		負 債 之 部	
未払込資本金	375,000.00	資本金	500,000.00
土地	94,217.50	借入金	112,500.00
家屋及構築物	19,417.37	支払手形	98,988.54
機械	35,721.06	未払金	6,763.00
船渠	15,587.78	社員職工積立金	482.01
船舶	4,214.30	仮受金	150,400.00
什器	1,979.26	播磨造船所	84,916.21
工具	24,261.29	当期純益金	132,140.98
線路	2,973.24		
製修勘定	170,993.42		
貯蔵品	149,500.66		
未収金	9,315.46		
有価証券	200.00		
仮払金	177,349.03		
銀行預金	4,936.19		
振替貯金	85.90		
現金	438.28		
合計金	1,086,190.74	合計金	1,086,190.74

利益金処分

金 拾参萬貳千百四拾円九拾八銭

内訳

金 壹萬参千五百円也

同 四萬円也

同 貳千五百円也

同 壹萬貳千五百円也

同 六萬参千六百四拾円九拾八銭

積立金

諸機械減価償却積立金

役員賞与金

利益配当金 (二割)

後期繰越金

帝國汽船株式会社 神戸市東川崎町一丁目 (原書 P78~81)

設立 大正五年十一月一日

目的 海運及船舶売買仲立業

資本金 壹百萬円也 払込済

## 重役の氏名

取締役社長 鈴木岩次郎（原文ママ。正しくは“岩治郎”） 取締役 柳田富士松  
取締役 西川文蔵 同 井田亦吉  
同 芳川筍之助 監査役 日野誠義

## 会社の沿革 現況

同社は鈴木商店分身会社たる南満州物産株式会社船舶部を分離独立せしものにして、大正五年十一月一日設立登記を為せり。

抑も、船舶部の独立は海運界の大活躍時に際し大飛躍を試み、以て多大の利益を獲得せん方針なるや勿論なるも、一面自店貿易業に必要な船腹の調節を按配するの任務をも為すものなり。

創立匆々斯界の好調に乗じ、或は船舶を売買し新造船の計画を樹て、或は多数傭船を為してサブチャーターする等一般海運業者として斯界に一勢力を為して活躍しつつあり。

## 本年上半期第一回決算左の通り

(単位：円)

資 産 之 部		負 債 之 部	
社船勘定	258,959.04	株金	1,000,000.00
傭船勘定	116,577.98	支払手形	616,666.67
門司代理店	297.30	船員預金	20,162.60
仮払金	3,415,261.76	仮受金	860,847.54
受取手形	5,555.00	鈴木商店	1,021,062.31
		当期利益金	277,911.96
合計	3,796,651.08	合計	3,796,651.08

## 利益分配

金 貳拾七萬七千九百拾壹円九拾六銭 当期純益金

内

金 壹萬五千元也

法定積立金

金 七萬五千元也

通常配当金

同 拾七萬五千元也

特別配当金

同 壹萬貳千九百拾壹円九拾六銭也

後期繰越金

備後船渠株式会社 広島県御調郡三庄村（原書 P81～84）

設立 明治 卅 四年六月

目的 造船修繕鉄工業

資本金 拾五萬圓也 払込済

#### 重役の氏名

取締役社長 小杉辰三	専務取締役 松尾忠二郎
取締役 田宮嘉右衛門	取締役兼技師長 泉 京次郎
取締役兼船体部技師 三上英果	監査役 依岡省輔
監査役 木村 基	相談役 西宗元次郎

#### 沿革及現況

同社の前身は明治三十三年一月頃、三庄村有志者が資本金参千圓の合資組織にて設立せられたるものにして翌年六月、更に拾五萬圓の株式組織に変更せり。同三十六年八月、西宗元次郎氏入って社長となり拮据経営中、日露戦役当時宇品港出入御用船修繕を引受け、業況頓に活気を呈し来り。

同四十年、船渠を増設する等漸次発展を告げ、社運隆盛に赴むきつつありしが本年六月、社長兼大株主たる西宗元次郎氏持株の大部分を鈴木商店に譲り受け、総株数の七割以上に達し、会社の債務三拾萬圓を引受け、前記重役の就任と共に従来の大坂出張所を神戸製鋼所内に移し、全然鈴木系統により経営せらるるに至れり。

而して、同社の現在に於ける生産能力は修繕船約二十萬噸、一千噸乃至二千噸型汽船四隻の新造を為すに過ぎざるも、近く資本金を五拾萬圓に増額し益々事業の拡張を図り、海岸埋立、船台の増設、工場の建築を為し、面目を一新するに至るべし。

尚、本年度上半期に於ける総益金約六拾萬圓に達し、全財産百貳拾萬圓を計上せるが、目下建造中に係るものは鉄船一千噸型二隻の外小型の分尚四隻あり、何れも明年五月迄に竣功を告る予定なるが、同社は主として大型鉄船の建造及修繕を目的とし、将来斯界に活躍すべき抱負の下に目下事務員以下職工約千四百名内外を使役し、大に多忙を極めつつあり。

因みに、同社の取締役兼技師長たる泉京次郎氏は東京商船学校出身にして、日本郵船会社及逋信省海事課等に勤務し多年斯界の造船最も深く、又船体部主任技師三上英果氏は三十九年東京帝大工科出身の工学士にして造船に関する知識と経験に富み、同社の為め努力しつつあるが、元來同社は広島県下因島の東南端に在りて尾道市を距ること南十海里、神戸港より約百海里にして東西は小丘を以て圍繞せられ、南は瀬戸内海の航路に面し、潮流緩やかにして四時波浪を見ること稀にして頗る地の利を占めて居れりと云ふ。

内國砂糖合資会社 大阪市南区末吉橋通二丁目（原書 P84～87）

設立 明治四十三年二月

目的 砂糖委託販売

資本金 参萬円也 払込済

#### 社員の氏名及出資額

金 六千七百円也	無限責任	森川 泰
金 壹萬円也	有限責任	谷 治之助
同 六千七百円也	同	西岡貞太郎
同 六千六百円也	同	日野誠義

#### 沿革及内容

同社は大阪市南区末吉橋通二丁目砂糖問屋鈴木商店が従来沖縄糖を扱ふに際し、直接産地との取引を為し居たるが、元来大阪市内に於ける黒糖は総て黒糖拾壹組合の手を経て扱ふの慣習あり。

然るに、同社は資力膨大に伴い是等の組合と対抗し来りたるが、其後黒糖及白下糖、大東島糖、其他産地の移入するものありて、単に昔の如く沖縄産糖の取扱ひにのみ甘んずるは市場の趨勢に伴はざるに至り、且鈴木商店として委託品を受くるに当り自ら之を購入する場合に手数料支払、其他煩雑の手續を生ずるを以て、遂に共立物産株式会社、大阪砂糖会社、大阪糖業会社、安部幸商店と新た荷受問屋を糾合して南区安堂寺橋通二丁目に同社の設立を遂げ、前記の四社と共同して樽揚一切の荷受を為し、更に五六年前現所に移り、爾来一二社員の更迭ありたるも、兎に角内容は純然たる鈴木商店の経営に係るものにして、表向の業務を分割したるに外ならず。

#### 現況

創立以来専ら沖縄、大東両島の産糖荷受に任じ、黒糖類は一般の慣習によりて入札法を以て黒糖十一組合に売却し、何等の波瀾、曲折無く、極めて平調の経路を辿り今日に及ぶべきものなり。

而して、時に産地直接に買取り、更に自ら荷主として入札に付する事あるも、何分鈴木商店の別働隊なるにより、資金窮迫を感じずる事無く、森川氏主として経営の衝に当り、荷受一ヶ年拾壹万挺、指定委託五萬挺内外の取扱を為し、歩口銭によりて相当の業績を挙げつつあり。

日本輪業合資会社 兵庫県武庫郡西灘村岩屋（原書 P87～88）

目的 各種製品ゴム販売  
設立 大正三年五月  
資本金 壹萬円也

出資社員氏名

金 九千円也 無限社員 酒井丑松  
金 壹千円也 有限社員 今井完造

沿革及現況

同社は大正三年五月の創立に係り、主として東工業株式会社岩屋分工場の製造に係るゴムタイヤ、バアキューム、ヒーターホース類の専属販売を為すにありて、同社にて製造するに非ず、単に東工業の販売並に之に伴う一切の事務を担当し居れり。

尤も、岩屋同輪業社は全く出張所の如き観ありて、販売全部は鈴木商店内ビール販売部に於て処分しつつあり、原料仕入は鈴木商店南洋爪哇島支店より年額二萬ヘール、金額拾萬円内外を仕入れ居れり。

製品の主なるはタイヤ（自動車、自転車）、バアキューム、ヒーターホース類にして、近時シウスカバーの製造に苦心しつつあり。販路は内地を主とし、超過品に対しては朝鮮、支那方面に輸出し、年商内高貳拾萬円内外を計上し居れり。

浪華倉庫株式会社 大阪市北区堂島濱通三丁目三番地（原書 P88～89）

設立 大正六年  
目的 一般倉庫業  
資本金 壹百萬円也 払込済  
投資額 壹百萬円内外

重役の氏名

取締役 藤田助七 取締役 宮本政次郎  
同 柳田富士松 同 井原五兵衛  
同 藤田 毅 同 山本節次郎  
監査役 鈴木岩次郎（原文ママ。正しくは“岩治郎”） 監査役 松原仲次郎

沿革 現況

同社は鈴木商店が其積極的政策に基き財界活躍の結果、斯業の前途に嘱目し、適當の既設事業を物色中、大阪安田倉庫の売買契約成立し、六年六月買収して資本金壹百萬円払込済とし、名称を浪速倉庫株式会社（原文ママ。正しくは“浪華倉庫”）と改称し、引続き一般倉庫業を經營し好況を呈し居れり。

大正生命保険株式会社 東京市麴町区有楽町一ノ三（原書 P90～96）

設立 大正二年四月

資本金 五拾萬円也（内拾貳萬五千円也払込）

#### 重役氏名

取締役社長 伯爵 柳原義光	専務取締役 岡 烈
取締役 植村俊平	取締役 荒井泰治
取締役 下坂藤太郎	同兼支配人 金光庸夫
取締役 藤田助七	監査役 鈴木岩治郎
監査役 柳田富士松	同 金子直吉

右重役の外<sup>ほか</sup>主なる株主は、鈴木よね、桂二郎、小松楠彌、西川文蔵、林謙吉郎、藤崎三郎助の諸氏なり。

#### 既往及現状

当社は生命保険を営む目的を以て明治四十四年頃岡重役が起業目論見を為し、後<sup>のち</sup>鈴木一家の藤田助七、金子直吉、小松楠彌、西川文蔵、柳田富士松の諸氏を發起人たらしめ、創立事務所を岡氏方に置き株式の募集に着手せしも、中途にて行<sup>ゆきなや</sup>悩みの傾向となり、前記鈴木一家の投資を得て大正二年二月中登記認可を得、専ら縁故募集にて満額に達し同年三月十八日、四分の一払込を完了し、四月一日現所に移り、五月五日其<sup>そのすじ</sup>筋の認可を得て会社の成立を告げたり。

元来、同社は株式組織と相互組織との長所を採用し、殊に相互会社に在りては基金の利子を配当し、尚剰余金ある時は之を契約者に配当するも、同社は之に反して株主配当を為し、其他<sup>そのた</sup>は全部公債を買入れ日本銀行に保管を託すと云ふにありて、此等<sup>これら</sup>の利益金の大部分は保険契約者のために五ヶ年毎に現金を配当し、每期加入当時より配当々時迄払たる保険料の割合に応じて支配を為すの規定あり。

兎<sup>と</sup>に角、同社は鈴木一派を以て組織し、岡氏以下重役も亦<sup>また</sup>比較的<sup>まじ</sup>真面目の人物なるを以て会社も相当の信用を有し、現在大阪、京都、広島、名古屋、福岡、福島等に支社を有し、其他<sup>そのた</sup>北陸支部（富山）、北海道支部（札幌）、朝鮮支部（京城）、台湾支部（台北）を設け、各地に代理店を千五百八十七ヶ所に設置せるが、北海道の成績最も良好にして東京府之に続くも、新規加入の成績は寧ろ<sup>むし</sup>地方に於て好況を示し居れり。

翻<sup>ひるがえ</sup>て、会社創立以来の業績は大正二年五月、即ち設立より同年十二月末日に至る満八ヶ月間に於ける第一回年度末現在、保険契約高五百四拾七萬七千円内外に達し、百拾四円余の純益を挙げたり。

越へて大正三年度は年末現在高千七百万円に達し、利益金六千七百貳拾余円を計上して次年度に繰越し、大正四年度にありては年末現在保険契約高二千<sup>にじゅう</sup>廿四万百円に達し、利益金壹萬三百九拾余円を得、之を次年度に繰越せり。

大正五年度に入りては、一月以来十二月末日に至るまで七百拾参万余円の新契約を結び、復活拾壹萬円、之に対しては解約消滅一千萬余円、<sup>その他</sup>減退の事故等に依り差引三百拾六萬余円の純減額を計上し、<sup>かつ</sup>且十、十一、十二月に於て懸賞付を以て勧誘員を督励し、大勸誘に<sup>しやうりよ</sup>焦慮せるが、十、十一の両月に亘りカード整理の結果（<sup>そのすじ</sup>其筋の検査に依る結果なりとも云ふ）約三百萬円内外の解約を出し、著しく契約の退減を<sup>あら</sup>現はしたるが、従来同社の契約高が著しき成績を示せると拘はらず、解約の<sup>きんしょう</sup>僅少なりしは同業者間に疑問とせられたるものにして前記カード整理は当然たるものなりと謂ふべく、之が為め十二月末現在の契約高は千七百萬円余に減退したり。

然れど、利益にありては<sup>かえつ</sup>却て良好の方にして、二萬九千余円の純益を挙げ、株主に対しては七千五百円の利益配当を為し、<sup>その</sup>其財政内容は比較的堅実なる方にして、責任準備金五十九萬円、前年度繰越金壹萬余円を有せり。

<sup>しこ</sup>而して、大正六年上半期の業況は比較的順調にして、前年末に対し人員に於て貳千四百九拾四人、契約金額二百三十二萬千貳百八拾貳円の増加を示し、常態を維持しつつあり。

因みに、本会社は設立後日尚浅きも、<sup>しぎょう</sup>斯業会社中其成績比較的良好の方なるが、<sup>や</sup>遣り口余りに派手に失し、<sup>やま</sup>募集上稍堅実を欠くの傾きあり。

従て、大正五年度の如き意外の解約高を計上するに至りしは外観の割合に内容充実せりとは称し難く、今後相当の努力を為さざれば、決して前途の樂觀を許さざるものと觀察せらる。

自大正五年一月 至同年十二月決算表

(單位：円)

資 産 之 部		負 債 之 部	
未払込株金	375,000.00	株金	500,000.00
現金	45.22	責任準備金	1,004,363.40
振替貯金	50.45	仕払準備金	11,702.46
銀行預金	340,723.26	代理店借	7,872.59
貸付金	3,542.96	仮受金	273.80
有価証券	642,891.80	現金	9,186.51
不動産	24,282.99	利益金	29,152.90
什器	11,977.63		
未収入利息	1,819.07		
未収保険料	49,365.86		
支社支部勘定	36,841.15		
代理店貸	59,681.02		
仮払金	14,110.70		
家屋敷金	1,398.21		
貯蔵品	821.34		
合計金	1,562,551.67	合計金	1,562,551.67

利益金配当

金 貳萬九千五百五拾貳円九拾錢也 当期利益金

内訳

金 壹千五百円也	法定準備金
〃 壹萬壹千円也	保険契約利益配当金
〃 貳千九百円也	役員賞与金
〃 七千五百円也	株主配当金
〃 六千貳百五拾貳円九拾錢也	後期繰越金

日本酒類醸造株式会社 愛媛県宇和島町 (原書 P96~100)

設立 明治三十九年十二月

目的 酒類醸造販売業

資本金 参拾萬円也 払込済

投資額 参拾萬円内外



## 重役氏名

取締役社長	宮本政次郎	常務取締役	西岡貞太郎
取締役	窪田駒吉	監査役	山村豊次郎
監査役	土屋新兵衛	支配人	戸坂隆吉

## 会社の現況

同社は明治三十年の設立にして主に焼酎しょうちゆうの醸造販売を為し、苦心努力の結果、稍成績かぶの見るべきものあり。

漸次設備の完成を期し、絶へず新式機械等の研究を不怠おこたらず、鋭意発展を計りつつありて、現今大里酒精工場と共に相当斯界しがいに声望せいぼうを有し、四国、九州、山陽、山陰其他内地各方面そのた及満鮮地方に販売し、年額八十萬円乃至壹百萬円内計を計上し居れり。

大正六年三月七日隣家入江造船所より火を失し、倉庫五棟、粕取焼酎工場かすとりにしやうちゆう壱棟外二三の半焼となりしも、製品倉庫並に工場本館等は幸にも類焼を免れ、九月九日より平常の通り操業せり。焼失商品、機械、建物に対しては夫々火災保険を付しありしを以て、別に直接の損害高として認むべきものなしと云ふ。

尚、大正六年上半期決算左の通り

(単位：円)

資 産 之 部		負 債 之 部	
土地	1,752.00	株金	300,000.00
建物	10,120.87	未払税金	170,602.08
機械器具	113,098.00	未払金	7,234.41
八幡浜工場	24,615.79	仮受金	1,000.00
原料	70,447.73	支払手形	220,000.00
貯蔵品	9,596.55	諸積立金	18,110.00
製品	286,647.58	前期繰越金	5,759.89
製造仕掛品	13,405.98	当期利益	15,221.24
仮払金	40,373.45		
貸付金	1,939.85		
火災整理勘定	46,575.46		
売掛代金	76,877.18		
未収入金	5,038.50		
銀行預金	17,225.30		
現金	213.38		
合計金	737,927.62	合計金	737,927.62

## 利益分配

金 壹萬六千六百五拾円四拾銭 当期利益金  
〃 五千七百五拾九円八拾九銭 前期繰越金  
合計 金 二万二千四百拾円貳拾九銭

### 内

金 壹千四百二拾九円拾六銭 減価償却金  
金 七百七拾円也 法定積立金  
金 千五百三拾円也 別途積立金  
金 四百円也 役員賞与及交際費  
金 壹萬〇九百八拾円也 配当金（年八分）  
金 七千参百壹円拾参千也 後期繰越金

山陽製鉄株式会社 大阪市南区順慶町三丁目<sup>にじゅう</sup>廿七番屋敷（原書 P100~105）

設立 大正四年十二月<sup>にじゅう</sup>廿四日  
資本金 参拾萬円也（三千株 普通株 三千株 優先株）  
払込金 貳拾五萬円也  
投資額 拾萬円内外

## 重役氏名

取締役社長	松田茂太郎	取締役	松島 誠
取締役	川合良男	取締役	<sup>よりおか</sup> 依岡省輔
同	野島円次郎	同	長瀬大五郎
同	岩本定喜	監査役	福井源次郎
監査役	田宮嘉右衛門	同	黒田正暉

## 現況

同社は野島氏所有の<sup>ふたみ ひ び</sup>双三、比婆両郡に<sup>またが</sup>跨る山林壹萬余町歩を買収し、雑木よりメチール、<sup>もくさくさん</sup>木醋酸等の採取を主とし、副業として山林に存在する<sup>てつきい</sup>鉄滓を原料とせる製鉄業を<sup>いとな</sup>営まんとするものにして、同地付近に鈴木商店の経営せる木材<sup>かんりゅう</sup>乾餾事業ありしかば、野島氏と交渉の結果、<sup>と</sup>兎に角会社を成立せしめたるにて、野島氏は山林何町歩を何程にて買収せしや尚明かならざるも、之に資本金を倍額参拾萬円に増資し、新株拾五萬円は優先株として一割二歩位の配当を最低限度となすべき事となせり。而して、<sup>しこう</sup>現資本の内拾五萬円は単に<sup>その</sup>該山林を評価し振替へたるものなり。

<sup>しこう</sup>而して、<sup>かんりゅう</sup>乾餾事業は今春より開始し、<sup>あたが</sup>時恰も<sup>その</sup>其製品たるメチール価格騰貴の折柄とて相当利益を挙げ、上半期決算は壹割の配当を為し得る由。又製鉄業は目下原料<sup>しゅうしゅう</sup>蒐集中にて近く<sup>そのせいれん</sup>其製錬に着手する筈なるが、果して予定の結果を得べきや否や未定なるも、同地方にて既に着手せる中国製鉄会社の相当成績を挙げ居れるより見れば、同様の希望を<sup>しよく</sup>囑すべし。

尚、現重役の顔触を見るに、野島、長瀬、黒田の三氏を除くの外全部鈴木系の人にして、社長松田氏の如きは鈴木商店の顧問の地位にあり、松島氏は東レザーを主宰する外三重、伊勢、秋田等の各林業株式会社（木材乾燥より木醋酸、アセトン、メチールを採取し木炭を販売するもの）は全部松島氏を中心として設立せられたり。

然れば、山陽製鉄の事業其ものは果して有望なりや否や、今俄に逆賭し難し。

同社の大正六年上半期決算左の如し

(単位：円)

資 産 之 部		負 債 之 部	
未払込株金	37,500.00	株金	300,000.00
山林及鉱区	150,000.00	未払金	7,500.00
機械建物什器	279,000.87	借入及支払手形	241,698.73
道路	4,126.06	当期利益金	16,114.00
水路	11,908.71		
受取手形	8,000.00		
工場勘定	62,713.71		
乾餾製品	7,317.27		
仕掛品	2,146.15		
銀行	2,599.96		
合計	565,312.73	合計	565,312.73

#### 損益計算書

金 壹萬九千九百六拾七円九拾七銭	総収入金
〃 参千八百五拾参円九拾七銭	総損失金
差引 金 壹萬六千百拾四円	当期益金

金 壹千円 固定物償却金  
再差引 金 壹萬五千百拾四円

右利益金分配左の如し

金 壹千円	法定積立金
同 八百五拾円	賞与金及共済会寄付金
同 八千四百参拾七円五拾銭 (年一割五分)	優先株配当金
同 参千七百五拾円 (五分)	普通株配当金
金 壹千七拾六円五拾銭	後期繰越金

帝國<sup>ビール</sup>麥酒株式会社 福岡<sup>きく</sup>県<sup>けん</sup>企<sup>きく</sup>救<sup>く</sup>郡<sup>ぐん</sup>大<sup>だい</sup>黒<sup>くろ</sup>町<sup>ちやう</sup>(原文ママ。正しくは“大<sup>だい</sup>里<sup>り</sup>町<sup>ちやう</sup>”)(原書 P105~109)

設立 明治四十五年五月廿六日

目的 麥酒各酒類清涼飲料水製造販売

資本金 貳百萬円 払込金百五拾萬円也

投資額 四拾四萬円内外

#### 重役氏名

専務取締役社長	隅田伊賀彦	取締役	関谷福太郎
取締役	岸 耕三郎	同	酒井丑松
同	平高寅太郎	監査役	福水治郎
監査役	石谷亀一	同	川合良男

#### 会社の沿革 現況

同社は明治四十三年八月、牡丹<sup>ぼたん</sup>麥酒<sup>ビール</sup>株式会社と称し、山田弥八郎氏等有志の創設せる処なるが、一時經濟界の不振なりしと中<sup>ちゆう</sup>傷<sup>しやう</sup>讒<sup>せん</sup>誣<sup>そ</sup>説<sup>せつ</sup>を流布され、且<sup>かつ</sup>払込金の大部は敷地、工場、機械類の設備に充当せしため資金不足を訴ふるに至り同四十五年、之を鈴木商店の經營に移したるものにして、創業当時の醸造能力は僅かに一萬五千石に過ぎざりしが、其の後需要激増に伴い、増資の決行と共に新たに工場を増築し、大正三年度に於て五萬石の醸造能力を増加し、未だ数年を経ざる内に内外市場に櫻<sup>さくら</sup>ビール<sup>ビール</sup>の<sup>せい</sup>声<sup>こゝろ</sup>価<sup>おおい</sup>大に<sup>せい</sup>挙<sup>か</sup>がり、現今にては七萬貳千石の多きに達せり。

而<sup>しかう</sup>して、其<sup>その</sup>販路は九州を中心として全国各地に亘り、滿鮮各地を占め、戦乱勃発を動機に南洋、印度方面に驥<sup>き</sup>足<sup>そく</sup>を展<sup>の</sup>べ、日<sup>お</sup>を逐<sup>お</sup>ふて益活躍しつつあり。

然<sup>しか</sup>して、同社醸造の櫻<sup>さくら</sup>ビールは当初<sup>だいちゆう</sup>独逸<sup>どいつ</sup>式<sup>しき</sup>醸造<sup>じやうぞう</sup>に倣<sup>なら</sup>へるものにして、其<sup>その</sup>風味甘くして比較的苦味と酒精の刺戟少無く、婦女子と<sup>しよせい</sup>虽<sup>すく</sup>も口<sup>くち</sup>に適<sup>いへど</sup>するの用意の下に醸造され、創立日尚ほ浅きに拘はらず数次の拡張により其<sup>その</sup>醸造高五倍するの盛況を示し、其<sup>その</sup>原料の如きは総て内地産にして、海外に原料の供給を仰ぎたる諸会社が<sup>このたび</sup>這回<sup>このたび</sup>の戦乱に多大の打撃を蒙りたるにも拘はらず、之を機会に販路を拡張し得たるは同社の<sup>ほこり</sup>誇<sup>こゝろ</sup>とする処なり。

因みに、同社本年上半期の決算左の如し

(単位：円)

資 産 之 部		負 債 之 部	
未払込株金	500,000.00	株金	2,000,000.00
地所	114,863.17	買掛金	55,462.75
興業費勘定	1,444,562.95	仮受金	6,744.49
同仮勘定	120,738.59	諸預り金	6,062.53
貯蔵品勘定	62,207.55	支払手形	824,103.81
材料品及貯蔵麦酒	526,028.03	借入金	500,000.00
売掛代金	661,619.71	未払金	150,222.73
受取手形	152,970.32	未払配当金	439.01
仮払金	19,971.45	法定積立金	14,500.00
諸預金銀行勘定	26,565.51	別途積立金	19,000.00
有価証券	1,548.30	前期繰越金	12,428.57
出張所勘定	23,359.74	当期利益金	65,836.01
金銀在高	364.58		
合計	3,654,799.90	合計	3,654,799.90

#### 利益分配案

金 六萬五千八百<sup>さんじゅう</sup>卅六円〇一銭 当期利益金  
 〃 壹萬貳千四百<sup>にじゅう</sup>廿八円五拾七銭 前期繰越金  
 合計 金 七萬八千貳百六拾四円五拾八銭

#### 内

金 參千五百円也 法定積立金  
 〃 五千円也 別途積立金  
 〃 五萬円也 配当金（年八分）  
 〃 參千円也 役員賞与金  
 〃 壹萬六千七百六拾四円五拾八銭 次期繰越金

東工業株式会社 大阪府西成郡稗島村大字赤須（原書 P109～115）

設立 明治四十年

目的 レザー及クロース等の製造

資本金 五拾萬円也 払込金拾九萬円也

#### 重役の氏名

取締役社長	佐藤法潤	常務取締役	松島 誠
常務取締役	窪田駒吉	取締役	福永次郎
取締役	齋藤熊三郎	同	岡 謹一郎
監査役	辻 泰城	監査役	伊地知重明

#### 会社の沿革 現況

同社の前身は東レザー商会と称し、東京に於てレザーの製造を為しつつありしを、同業の競争猛烈の爲め、同社の如き欠損累加の状態に陥りたる折柄同四十一年（原文ママ。正しくは“四十年”か）、鈴木商店は此事業の将来に着眼し、其株式を買収し実権掌握裡に収め、尔来前記重役の手に経営を移して營業の發展に努め来りしも、依然持續せる販売価格の競争と一般市況不振の爲め絶へず悲境の状態に在りしが、突発せる欧州戦乱の結果、勁敵たる欧州製品の輸入杜絶、就中価格低廉なる独逸品の漸次跡を絶つに伴はれ、内地製産の主力となる同社製品は漸く驥足を伸ばすの機運に際会し、殊に一般市況沈衰の結果として皮革、織物等の減退に反して安価のレザー製加工品は却て需要を増加するの傾向を生じ来り、且つ新製品たる護謨引模造皮及パテントクロース亦相当売行を呈し、内地品を以て輸入の欠陥を充当さるる等凡て有利の状態に向い来れり。

而して、同社の新事業とも云ふべき人造絹糸は最初は幾多の困難に遭遇したりしも、漸次改良進歩して殆ど輸入品に匹敵すべき優良品を確実に製造し得るに至りたるを以て、更に設備を拡張して専ら増加を図りつつあり。而して、本事業は将来全く輸入を防止し、更に進んで外国に輸出するに至るべき多望の事業たり。

尚、整毛即ち中毛を処理して「ショデー」即ち反毛と為す作業は、戦時は勿論戦後に於ても羊毛の代用品又は混用品として甚だ有望なるのみならず、之に用ゆる薬品は「レザー」製造に使用したる薬品の廃物を利用するを得るが故に、会社の事業として最も適當なる製品として各毛織会社の歓迎を受け、将来大に發展の見込あることを確信され居れり。

而して、五年一月より十二月迄一ヶ年の成績を觀るに、純益拾萬六千五百余円を挙げ、払込資本に対し年約拾壱割強の利廻りに相当せり。以て、前途益々有望なるを想見し得べし。

大正五年度決算左の如し

(単位：円)

資 産 之 部		負 債 之 部	
未払込株金	310,000.00	株金	500,000.00
特許権	1,219.00	法定積立金	20,000.00
土地	37,600.00	別途積立金	5,000.00
建物	117,256.20	職工積立金	232.61
機械什器工具	136,043.05	農工銀行借入金	8,308.94
有価証券	134,025.00	仮受金	7,343.46
原料	34,968.61	支払手形	576,569.98
塗料	13,306.36	未払金	7,500.00
木綿	22,900.65	掛買金	856.38
燃料	3,044.43	繰越益金	13,140.28
商品	18,786.42	当期利益金	106,566.99
二等品	204.05		
売掛金	31,426.04		
銀行預金	22,025.49		
現金	549.70		
立替金	15,148.61		
仮出金	5,822.55		
受取手形	35,924.00		
東京出張所勘定	59,709.18		
大阪出張所勘定	72,898.86		
敏馬分工場勘定	66,091.22		
米沢人造絹糸製造所勘定	59,591.87		
日本整毛社勘定	13,998.94		
鈴木商店勘定	30,172.66		
原料売掛金	2,805.75		
合計金	1,245,518.64	合計金	1,245,518.64

利益分配

金 拾萬六千五百六拾六円九拾八錢五厘	当期利益金
金 壹萬參千百四拾円貳拾八錢五厘	繰越利益金
合計 金 拾壹萬九千七百〇七円貳拾七錢	

内		
金 貳萬円也	法定積立金	
金 壹萬円也	別途積立金	
金 參萬五千円也	建物機械償却金	
金 四千五百也	賞与金	
金 參萬円也	配当金（一割六分）	
金 貳萬〇貳百七円貳拾七銭	次期繰越金	

### 紡績業（原書 P115～116）

時局以来、幾多新事業の画策に懈らず、以て戦時利益の獲得を図ると共に平和克復後の業礎確立に余念無き有様なるが、就中同店は原棉の輸入及綿糸、綿製品の輸出を取扱ひ、逐年業務の進展を示し居れるにも拘はらず、未だ紡績業に対しては自家経営は勿論、密接なる関係を有せる既設会社とても是無き状態にて、事業好みの同店としては多大の遺憾を抱き居りしが、斯業の戦時利益の益々多大なると、戦後も亦頗る囑望すべき事由あるを以て、昨年中佐賀紡績会社（資本金参百円 [原文ママ。正しくは“参百萬円”か]、内払込四分の一）の創立に際し約半数の株式を引受け、全然其実権を掌握せるも、独り佐賀紡を以て満足する能わず、密々既設会社に着目しつつある折柄、偶々天満織物会社が其資本金貳百萬円を一躍五百萬円に増加すべき既定方針の下に増資六萬株中二萬株は旧株二株に付一株を割当て、残余四萬株を去る三月中、大阪信託団の手を経てプレミアム付を以て売出したるより、同店は得たり賢こしと信託団に交渉の結果、些少のプレミアム付を以て一手に引受け従来所有の旧株を合し、今や全く同社の死命を制し得べき権利個数を有するに至れり。

而して、現在佐賀、天満両社に対する投資額約壹百萬円内外に達する。

### 佐賀紡績株式会社 佐賀市松原町八十三番地（原書 P117～123）

設立 大正五年十一月  
 資本金 参百萬円也 内払込金七拾五萬円也  
 目的 一般紡績織布業

#### 重役氏名左の如し

専務取締役 井田亦吉	取締役 橋本喜造
取締役 原 眞一	同 竹村房吉
同 土屋新兵衛	同 福田慶四郎
同 伊丹彦次郎	同 太田米三郎
同 川副綱隆	監査役 西岡貞太郎
監査役 古賀製次郎	同 松尾寛三
相談役 金子直吉	相談役 野口能毅



主なる株主（鈴木側）氏名左の如し

2,000 株	井田亦吉	2,000 株	西岡貞太郎
1,500 〃	土屋新兵衛	1,500 〃	宮本政次郎
1,500 〃	隅田伊賀彦	1,500 〃	森 衆郎
1,500 〃	竹村房吉	1,500 〃	波多野恕吉
1,000 〃	藤田助七	3,000 〃	山下亀三郎
3,000 〃	土屋、宮本、隅田、森、竹村、波多野六氏にて引受分配せり		

同上（橋本喜造氏側）

16,500 株	橋本喜造	2,000 株	原 眞一
500 株	川副綱隆	1,000 株	橋本氏に於て引受く

同上（佐賀側）

1,000 株	伊丹弥太郎	1,000 株	古賀善兵衛
1,000 〃	古賀製次郎	1,000 〃	福田慶四郎
1,000 〃	深川喜次郎	500 〃	伊丹彦次郎
500 株	太田米三郎	500 株	松尾寛三
500 〃	谷口清八	500 〃	下村詮之助
500 〃	古賀萬次郎	500 〃	勝田龍吉郎
500 〃	山口鍊一	500 〃	古賀春一
500 〃	田中猪作	外に公募分の二千株 略	

会社の沿革及現況

同社は佐賀市一部有志の発起に係り、市長野口能毅氏は発起人を代表して屢々阪神間を往来し、遂に半田綿行と提携し綿行自ら其株式二割以上の引受を約し、其他の株式募集に可及的尽力を惜しまざるべしとの有利なる条件を締結し、飯来数回に亘る集会を経て漸く古賀、百六、榮の三銀行に於て株式募集を引受くるに至りたるが、其後銀行団の斡旋誠意を歛き、何等具体的進行の経過を示さず、折角興起せる人気も漸く沈静に収せんとせり。

然るに、近時九州の各種事業に着目し来れる鈴木商店は同社の前途有望なるに矚目し、予て船成金の称ある橋本喜造氏と共に其株式大部分の引受を申込み来りしかば、氣勢俄かに揚り、同商店西部監督土屋新兵衛氏及井田亦吉氏、其他同地に出張し数回の会合をを経て、結局半田綿行との関係を絶ち、茲に鈴木系統の後援を受くることとなりしが、其の後打合せ愈進捗し、株式総数六萬株の内四萬株を鈴木、橋本他発起人十氏に依り引受け、残余の二萬株を佐賀側発起人に割当つる事とし雙方の協議成立し、大正五年拾月仮定款を作製するに至りしも、其後一般よりの株式引受申込み頻々たるものあり、会社発起の趣旨は斯業の性質を周知せしめ、汎く各階級の賛成を得るにありしを以て、特に発起人引受株数

の削減を図り、内貳千株を公募することとし、同年十一月六日より八日に至る三日間募集を発表したる結果、応募者一萬株以上に達し、創立委員も其割当てに困難せりと云ふ。

斯くて、同月中旬第一回の払込を徴し創立總會を開き、役員を選定を了り、茲に同社は適法の成立を告ぐるに至れり。

而して、会社は資本金を参百萬円とし、貳萬錘の紡績機と三百台の織機を据付け、主に十六番手糸の紡出に従事する目的なるが、其後時局の進展に伴ひ各種機械類及諸材料の価格は暴騰を告げ、特に紡機は世界の市場を通じて払底せる有様にして、注文を発するも容易に入手覚束無き状態なれば、果して幾年の後二萬錘全部の機械据付を了するに至るや、将亦其建設費に如何なる変動を生ずるやは不明にして、建設費の多寡は直接会社の利益率に多大の關係を有するに想到せば、同社の前途今俄かに逆賭すべからざるも、昨年同社が印度孟買に於て買取したる太糸七千錘の中古機械は紡機輸入の困難なる現下の情勢に徴し時節柄成功と称すべく、而も其の価格の如きも約拾萬円内外（一錘約拾三円内外）を支出したるに過ぎざるものの如し。

工場は佐賀駅に隣接せる地域三萬坪を有し、安藤組をして土木建築工事を請負はしめたるが、工費約三拾萬円内外にして既に基礎工事を了へ建築に着手し居れば、近く竣成を告ぐるに至るべく、一面女子の募集を開始し、既に養成女工を大阪某工場に依頼せる由なるが、諸般の準備着々進捗し、遠からず操業の開始を見るに至るべく、兎に角紡機は前記の如く太糸七千錘を据付けたるに過ぎず、残余の壹萬三千錘は到着期未定にして、差当り同社は既設七千錘と三百台の織機を製造に従事するものと見るの外無きが如し。

尤も、七千錘の能力は織機五百台を用ゆれば全部消化すべきやにて、一時予定の織機三百台を五百台に増加し、製品全部を織布すべしとの説もありしが、結局当分現状を維持することに決定せり。

而して、製品の販売及原料の仕入等は当初鈴木商店との契約に基き、全部同店に於て之を引受くる事となり居る由にて、相当安全なる地歩を有せり。

要するに、同社は鈴木商店と佐賀実業家との共同事業たるも、或意味に於ては鈴木商店の間接事業とも見るを得べく、同社が既に七千錘の機械を有し、近く事業の開始を見んとするの運びに至れる如きは斯業者の等しく其敏捷に驚嘆せる処なり。

天満織物株式会社 大阪市北区天満橋筋西一丁目（原書 P123～128）

設立 明治<sup>にじゅう</sup>廿年三月

目的 綿糸布製造販売

資本金 五百萬円也（払込貳百七拾五萬円也）

#### 重役氏名

取締役社長 藤井善助 専務取締役 岡 幸次郎

取締役 戸田猶蔵 監査役 宮川彦一郎

監査役 戸田榮蔵 監査役 野田廣三郎

#### 沿革 現状

同社は明治<sup>にじゅう</sup>廿年三月、資本金五拾萬円を以て設立し、綿糸布の製造を目的とせるが、爾来<sup>じらい</sup>幾度か経営難に陥り、或は社債を發行し、或は優先株を募集し、或は重役の内訖<sup>ないこう</sup>等幾多の波瀾曲折を経、年<sup>けみ</sup>を閲すると共に漸く進境<sup>しんきょう</sup>を示し来りしも、日露戦役後の好況時代に経営方針を誤まり、多大の困難を感じしも辛<sup>かろ</sup>ふじて難関を切り抜け、大正三年欧州戦乱突発以来、財界の活躍に連れ漸く回春<sup>かいしゅん</sup>の曙光<sup>しゅこう</sup>を認め、翌四年遂に優先株を普通株に引直し、資本を貳百萬円に増資し只管<sup>ひたすら</sup>発展に努力し来りしが、五年度に入り益々好況を呈し、各方面の注文<sup>ふくそう</sup>輻輳せるのみならず、露国行カーキー色小倉服地の注文を引受け相当の収益を収め、五年十二月株主総会に諮り資本金を五百萬円に増加せり。

爾来<sup>じらい</sup>工場宿舍等の改築を為し、前期末より漸次到着の紡機、織機<sup>そのた</sup>其他の緒機械大部分据付を了し、本年六月上旬より運転を開始せり。

而<sup>しこう</sup>して、本年上半期に於ける就業日数百六拾二日にして、此生産高、綿布九百六十二萬四千參百八十八碼<sup>ヤード</sup>、此反数<sup>このたん</sup>二十五萬千三百四拾反<sup>たん</sup>、製糸高三拾六萬八千四百六拾六貫四拾<sup>もんめ</sup>匁、一日生産額平均製布千五百五拾反<sup>たん</sup>内外を計上せり。

本年上半期決算左の通り

(単位：円)

資 産 之 部		負 債 之 部	
未払込資本金	2,250,000.00	資本金	5,000,000.00
地所	348,702.00	社債金	500,000.00
建物	815,979.00	積立金	750,000.00
機械	1,136,474.00	別途積立金	155,000.00
什器	13,642.00	社員恩給基金	27,500.00
紡織準備品在高	88,510.00	職員恩給	10,000.00
原棉在高	1,372,509.00	職工預り金	10,000.00
製布在高	42,670.00	保証金	19,740.00
製糸半製品在高	17,908.00	支払手形	517,650.00
製布半製品在高	39,081.00	仮受金	106,178.00
有価証券	19,148.00	買掛代金	1,154.00
仮出金	272,645.00	未払配当金	673.00
売掛代金	99,326.00	前期繰越金	99,590.00
受取手形	5,767.00	当期利益金	264,324.00
銀行預金	888,655.00		
金銀在高	369.00		
合計金	7,410,578.00	合計金	7,410,578.00

損益決算

金 貳拾六萬四千三百貳拾四円也 当期利益金

同 九萬九千五百九拾円也 前期繰越金

合計 参拾六萬三千九百拾四円也

内

金 壹萬五千円也

積立金

金 貳萬円也

別途積立金

金 五萬円也

機械建物減価償却金

金 五千円也

社員恩給基金

金 五千円也

職工恩給基金

金 壹萬参千貳百円也

役員賞与金

金 拾四萬九千円也

株主配当金 (旧株 年一割二分 特別 年二分)

金 拾萬六千七百拾四円也

後期繰越金

東洋製糖株式会社 本社 台湾嘉義廳南靖庄 出張所 東京麹町区有楽町一丁目(原書 P128~136)

設立 明治四十二年二月

資本金 壹千壹百七拾五萬円也 内払込金額 九百廿五萬円也  
外に社債 貳百五拾萬円内外を有せり

#### 重役氏名

取締役社長	下坂藤太郎	専務取締役	松方五郎
取締役	藤田謙一	取締役	岡 烈
同	日向利兵衛	同	石川昌次
同	松方正熊	同	田村藤四郎
同	小松楠彌	監査役	指田議雄
監査役	賀田金三郎	同	宮尾 麟
同	島村足穂	同	渡辺甚吉

#### 沿革及現状

同社は日露戦争後、事業の勃興時代、元社長徳久恒範<sup>ほか</sup>数名の発起により台湾に於て砂糖の製造販売、甘蔗<sup>かんしょ</sup>の栽培、購入及之れに付随せる事業を営み、且つ本社専属の鉄道に依り運輸業を営む目的を以て明治四十年二月設立せしものなり。

その後、内地に於ける経済界は事業熱の反動を蒙り萎靡<sup>いび</sup>振はず、殆ど恐慌に等しき状態に陥り其経営<sup>そこの</sup>頗る困難なりしも、此間に処し奮闘努力の結果能く其素志<sup>その</sup>を貫き明治四十二年、台湾嘉義廳南靖庄に大工場を建設し四十三年、更に烏樹林庄に第二工場を計画し、四十四年より製造を開始し、尔来<sup>じらい</sup>順調に向へり。

四十五年七月、現社長下坂藤太郎(原文ママ。正しくは“下坂”)就位、経営の首脳者となるに及び更に発展を告げ大正三年八月、斗六製糖を合併して八百萬円に増資し同四年五月、北港及月眉に工場を有せる北港製糖を併せて資金(“資本金”のことか)を壹千百萬円となし五年七月、台湾赤糖会社及沖縄県下大東島の経営者玉置商会より同島の事業一切を買収すると共に、資本金を現在の壹千百七拾五萬円に増資し今日に至る。

而<sup>しかう</sup>して、同社の台湾に於ける製糖工場は南靖庄、烏樹林、斗六、北港、月眉の五ヶ所にして、一昼夜の製糖能力、南靖庄工場は一千英噸(砂糖二千俵に相当す)、烏樹林工場は七百五十英噸(千三百俵)、斗六工場は五百英噸の分密工場と三百英噸の赤糖工場を有し(壹千俵)、北港工場は一千英噸(二千俵内外)にして、其器械の優良なる全島第一の称あり。月眉工場は三百英噸に過ぎざるも設備最も完成し、理想的工場と評せらる。

尚、現在の原料採取区域は七万甲歩（一甲歩は内地の一町歩に等し）、所有地面積六千六百五拾参甲歩にして、敷設せる鉄道は百七拾三哩に達し、貨車千三百四輛、客車三十二輛、機関車二十二台の外気動車二台を所有し居れり。

#### 営業状態

同社の創立以来に於ける営業成績を挙ぐれば左の如し

年次	利益金	配当率
明治四十一年	六拾七萬三千円	一割二分
〃 四十二年	四拾九萬三千円	〃
〃 四十三年	八拾参萬九千円	〃
〃 四十四年	百〇七萬三千円	一割五分
大正元年	二十壹萬一千円	一割二分
〃 二年	三十八萬一千円	一割
〃 三年	百五拾壹萬四千円	一割四分
〃 四年	三百三拾八萬二千円	三割七分五厘
〃 五年	五百拾貳萬六千円	三割六分

尚、大正四年度末より副業として糖蜜を原料とせる酒精を製造し、一ヶ年約八千石を醸造せり。其成績良好なるも同社産蜜に尚余裕あるを以て、製造能力を増大すべく目下拡張工事進行中。

又、同社の製品は年産額百七萬擔内外にして、原料糖、輸出糖、車糖、分蜜糖を主とし品質優良の評あり。

販路は原料糖は大日本、明治両製糖会社に供給せる外支那、香港、大連、印度、濠州、米国等に輸出し、消費糖は内地市場へ凡て鈴木商店を経て販売し居れり。

尚、同社は交通不便の爲め、大東島（沖繩郡那覇港の東二百十二哩の海上三島嶼より成る）、大瀬崎間に私設無線電信所を設置せる外、甘蔗耕作と製造を分業となす目的にて着々事業の改善発達を図り、兎に角台湾、明治、塩水港製糖会社と対立し、粗糖界一方の重鎮と称せられ、業容逐年良好に向ひ、社運日に進み業礎益々堅実を加へつつあり。

自 大正五年七月一日 至 同六年六月<sup>さんじゅう</sup>日 決算左之通

(単位：円)

資 産 之 部		負 債 之 部	
未払込株金	2,025,000.00	株金	11,750,000.00
土地	1,648,323.23	法定積立金	497,000.00
建物	1,951,951.61	別途積立金	670,000.00
機械器具	5,359,766.90	機械建物消却積立金	1,243,500.00
鉄道	2,467,710.15	職員職工恩給基金	100,000.00
什器	94,570.10	未払配当金	8,094.14
有価証券	231,725.50	社債金	2,500,000.00
農具及家畜	21,385.08	仮受金	49,791.71
貯蔵品	453,731.01	未払金	520,994.83
大東島勘定	1,414,163.75	未納消費税	45,246.00
頼尚文糖廓買収費	30,000.00	社員積立金	81,565.47
在庫製品	1,373,469.05	前期繰越金	511,384.26
委託製品	3,454,695.87	当期利益金	6,126,875.44
銀行預金	60,203.01		
貸付金	509,679.89		
受取手形	777,833.67		
供託金	110,883.64		
仮払金	688,168.03		
次期農事費	449,398.31		
肥料立替金	772,653.64		
未収金	156,416.74		
現金	53,220.64		
合計金	24,104,951.85	合計金	24,104,951.85

利益分配

金 六百拾貳萬六千八百七拾五円四拾四錢 当期利益金  
 同 五拾壹萬壹千三百八拾四円<sup>にじゅう</sup>廿六錢 前期繰越金  
 合計 金 六百六拾參萬八千貳百五拾九円七拾錢

内

金 壹百萬円也 機械建物其他償却金  
 差引 金 五百六拾參萬八千貳百五拾九円七拾錢

内  
金 参拾萬円 法定積立金  
同 六拾萬円 別途積立金  
同 四拾萬円 機械建物償却積立金  
同 拾萬円 職員職工恩給基金  
同 参拾萬円 役員賞与金及交際費  
同 百六十五萬壹千貳百五拾円 配当金（年二割）  
同 百参拾貳萬壹千円 特別配当（年一割六分）  
同 九拾六萬六千九円七拾銭 後期繰越金

#### 沖見初炭坑株式会社（原書 P136～140）

本社 下関市観音崎町五番地ノ一  
鉱業所 山口県厚狭郡宇部村字岬  
設立 大正五年九月  
資本金 五拾萬円也 払込金 卅七萬五千円也（額面百円）  
目的 石炭の採掘販売

#### 重役の氏名

専務取締役	西岡貞太郎	常務取締役	藤井 保
取締役	宅野 潔	取締役	石田亀一
同	浅田泉次郎	同	岡 和
同	三隅珍太郎	監査役	宮本政次郎
監査役	土屋新兵衛	同	真鍋善作

#### 沿革及現状

同社の鉱区は山口県下宇部半島の一角に位置し、数年前より現常務藤井氏の所有鉱区なりしも、炭界不振の爲め採掘するに至らず、拋棄の状態なりしを鈴木商店に買取せられ、同店関係者名義の下に資本金五拾萬円の株式会社と組織し、同鉱区を拾四萬六千余円にて継承したるものにして、目下起業中に属せり。

元来同鉱区は宇部半島沿岸の海底にして総面積は四百七萬壹千余坪と註せられ、其採掘設計は水底七拾尺を掘り下げ、本坑二道、斜坑四道（何れも三尺層）を掘鑿し之を主坑とし、別に二道の副坑を作り、主坑の一日採炭量は二千噸乃至二千五百噸の予定にて、主坑、副坑共に明七年九月頃より採掘し得べく、仕向先は京阪地方、其他内地用に供給する目的なるが、炭質は稍劣等品なるも出炭量の豊富、採掘費の低廉、搬出の利便等有利なる条件を具備せるを以て、採算上優に年五六割の配当を成し得べき確信を有し居れり。



而して、運搬は同海岸が常に波濤高く荷役に困難なるより、既設宇部軌道と官線とを利用する計画なりしも、斯くて○○○○○○○○○○を要するより規模を拡大し、七萬円内○○○○○を以て完全なる築堤を設け、二百噸級の積船十隻○○○に出入操縦し得る程度に設計を変更し目下海面埋立工事中なるが、竣成迄には前途尚相当の日子を要すべき模様なりと云ふ。

同社の本年上半期貸借対照表を挙ぐんば左の如し

(単位：円)

資 産 之 部		負 債 之 部	
未払込株金	250,000.00	資本金	500,000.00
鉦区代	146,121.60	鉦区代未払金	50,000.00
土地及建物	12,656.13	借入金	30,000.00
機械器具	30,094.00	未払金	15,925.56
什器	1,477.54		
興業費仮勘定	135,306.80		
貯蔵品	7,145.78		
仮払金	2,515.78		
銀行預金	4,911.08		
現金	1,098.28		
前期損失金	56.18		
当期損失金	4,542.39		
合計金	595,925.56	合計金	595,925.56

株式会社第六十五銀行 神戸市兵庫戸場町 (原書 P140~146)

設立 明治三十一年一月

目的 一般銀行業

資本金 貳百萬円也 払込額百拾萬円也

重役の氏名

取締役 藤田助七

取締役 上村喜平

同 藤井定介

同 乾 新兵衛

同 増田 斜

監査役 鈴木岩次郎 (原文ママ。正しくは“岩治郎”)

監査役 宇都宮直七

同 大原與左衛門

## 沿革 現状

同行は元寒天業にして豪商たりし故池田貫兵衛氏を中心とし、明治三十一年一月設立せるものにして、主として兵庫米肥雜穀商の金融機関を目的とせり。当時米肥雜穀界は資産信用あるもの比較的僅少にして、従って経営の衝に当るものは少なく共敏腕家を要するや勿論なり。

然るに、同行は最初より適任者を得ざりし結果、常に成績の見るべきもの無く頗る苦心し、之れが挽回策として当時正金銀行員たりし関口直徳氏を支配人に挙げ、経営大に努めしが、漸次成績の良好となり漸く愁眉を開きしに、幾何も無くして遂に一大整理を断行するの止む無きに至り、経営上の蹉跌を来せり。

而して、其の主因は数年来取引せる京都市堺力蔵神戸支店主任、瓜谷英一氏は同業者中の手腕家と目され、殊に銀行家を籠絡するに妙を得、同行をして正金銀行の信用状に対する保証人たらしめたり。

然るに、大正元年末に至り同店は相場の激変により数十萬円の大欠損を生じ、遂に破産せしかば、保証人たりし同行は勢い正金銀行に対し責任を果さざる可からざる事となれり。之即ち、同行整理の主因たりしなり。

茲に於て鈴木商店に援助を求め、同店の主張を容れて整理を断行せり。当時同行の資本金壹百萬円、払込金八拾五萬円を資本金五拾萬円払込済に減資し、此差額參拾五萬円及積立金拾參萬四千六百円、滞貨準備金拾六萬円並に前期繰越金四萬五千円を以て諸損金六拾九萬壹千余円を補填せり。

斯くして、同行は茲に清浄健全なる状態となりたるを以て、直ちに資本金を貳百萬円に増加し、従来兵庫部本位たりしを更に神戸部及大阪に支店を設け、鈴木商店の手に依りて経営せらるることとなり、同時に旧重役は引責辞任し既重役の就任を見るに至り、尔来専ら堅実主義の下に長期の貸付を避け、主として商業手形の割引及当座貸越を為し、其他の貸付金は時節柄船舶担保約六割、不動産担保一割六分、有価証券商品担保二割四分位にして、而も担保付貸付金は総貸付額の二分五厘位に過ぎずして、其他は当座貸越、手形貸付、コール等なれば、従て危険の程度比較的僅少なりと云ふべし。

而して、遊金の運用に就ては比較的多額ならざる結果ならんも、有価証券の購入等を避け、大部分はコール若くは鈴木商店に一時利用を依頼する等の遣り口にして、従て株界の騰落に就ては担保品以外利害關係僅少なり。

然れば、同行の現状としては急激な発展は期し難きも、漸次業礎<sup>ぎょうそ</sup>確實を期し、整理以来毎期七朱の配当を持続し、本上半期は八朱配当希望者ありしも、当分七朱にて益々業礎を強固ならしむる方針なりと云ふ。

現在支店は神戸市内<sup>たもん</sup>多聞通、西柳原、兵庫、南支店、瀧道<sup>たきみち</sup>、神戸支店の六ヶ所及大阪支店一ヶ所あり、経営の首脳者としては元住友銀行にて相当経験を有せる取締役上村喜平氏なるが、氏は整理当時鈴木商店側を代表し就任せるものにして、経営上の大体方針は鈴木商店の意見に依るものなる事は勿論なり。

大正六年上半期決算左の如し

(単位：円)

資 産 之 部		負 債 之 部	
未払込株金	900,000.00	資本金	2,000,000.00
証書貸付	1,711,220.51	法定準備金	75,000.00
手形貸付	962,029.07	行員退職給与金	3,570.00
当座預金貸越	1,119,181.20	当座預金	4,088,110.77
割引手形	8,575,068.74	特別当座預金	4,151,474.80
荷付為替手形	326,185.08	通知預金	55,000.00
他店へ貸	1,072,361.45	定期預金	4,793,994.23
支払承諾見返	16,142.18	他店より借	1,204,899.42
預ヶ金	94,534.49	支払承諾	16,142.18
露国証券	86,044.32	再割引手形	203,277.98
諸公債証書	386,890.00	未払利息	89,126.69
営業用土地建物什器	109,680.00	未経過割引料	43,750.28
所有不動産	12,534.75	当期純益金	92,140.23
現金在高	1,444,614.79		
合計金	16,816,486.58	合計金	16,816,486.58

#### 利益分配案

金 九萬貳千百四拾円貳拾參銭 当期利益金

#### 内訳

金 貳萬五千円也	法定積立金
同 壹萬円也	本店新築積立金
同 八千五百円也	賞与金
同 參萬八千五百円也	配当金 (年七朱)
同 貳千円也	行員退職給与金
同 八千百四拾円貳拾參銭	後期繰越金

東京毛織株式会社 東京府北豊島郡南千住町字地方橋場（原書 P146～153）

設立 明治三十九年十一月

目的 毛織物及毛糸製造販売

資本金 壱千壱百萬円也 内払込額七百四拾萬円也

但、総株 廿二萬株 内旧八萬株五拾円払込 第一新八萬株拾貳円五拾錢払込  
第二新六萬株四拾円払込

支店 北豊島郡王子町 荏原郡大井町 岐阜県大垣町

重役氏名左の如し

取締役会長	日比谷平左衛門	専務取締役	諸井恒平
常務取締役	日下吉平	取締役	山中隣之助
取締役	町田豊千代	同	門野重九郎
同	伊藤琢磨	同	塚口慶三郎
同	西川玉之助	同	小菅久徳
同	藤田謙一	同	奥田早苗
同	長島鷺太郎	同	井田亦吉
監査役	大橋新太郎	監査役	町田徳之助
同	清水雄次郎	同	杉浦甲子郎
同	宇佐美薫次		

沿革及現状

本社は元東京毛織物株式会社の後身にして、同社は資本金二百萬円、払込百六拾萬円にて日比谷平左衛門氏を会長とし経営し来り、一時は業況面白からざる時代ありしも、欧州戦乱後は露国軍需品の引受、輸入減少等の事由にて斯業界漸次好調を呈するに至りしかば、業況面目を一新し、一時は増資説さへ流布せられしが、大正五年十一月に至り殆ど疾風迅雷的に鈴木商店系統の東羊毛織（資本金三百萬円、全額払込）と合併仮契約の締結を為し、世人をして一驚を喫せしめしが、更に急転して東京製絨（資本金貳百萬円、百廿萬円払込）と合併談突発し、着着交渉進行して大正六年二月廿八日合同談成立を告げしかば、同日を以って東羊毛織、東京製絨の二会社は解散の手續を為し、三月一日を以て東京毛織物会社に併合、社名を東京毛織株式会社と改称し、資本金を壱千壱百萬円に増額し払込を七百四拾萬円と為したるが、之れ時局の然らしむる処とは云へ、一面関西の霸王たる日本毛織会社に対抗すべき準備とも云ひ得べきか。

而して、新重役は東京毛織現任八名の外に東京製絨側より七名、東羊毛織側より五名を加へ、合計二十名となし、前記顔触れの就任を見るに至り、全部上半期末迄を任期とし、本社は前記の如く千住橋場に、営業部は大井町支店内に置き、従来の如く営業を持続し来れり。

会社の製品は工場に依り従来<sup>よ</sup>の關係上<sup>やや</sup>稍趣<sup>ちやう</sup>を異にするも、千住工場は羅紗<sup>らしや</sup>他を主とせしが、  
 近来薄物の比較的上等品を製織<sup>せいしよく</sup>し、尚現今はトップの製造をも為すに至れり。

原料は毛織屑<sup>くず</sup>にして一般屑物商或は海外より原毛を買入れ、製品の内条絨は主として従来  
 三井物産<sup>そのた</sup>其他の手を経て海外に販売し、黒羅紗<sup>らしや</sup>は警視庁、鉄道院、逓信省<sup>ていしん</sup>管理局、学校等  
 に納入し、毛布は東京市内の卸商に販売せり。

又、王子支店の製品は羅紗<sup>らしや</sup>、ネル、セル、毛布類にして、原料は三井物産、大倉組、兼松  
 商店より供給を仰ぎ、販路は陸海軍を始め岩井、芝川両東京支店等を主とせり。

大井支店の製品及仕入先も王子支店と大同小異にして、販路は東京市内の間屋筋大部分を  
 占め、各工場とも相当の成績を示し居れり。

本年上半期の営業状態は好況にして、左記の如く年一割五分の配当を為せり。

大正六年上半期決算左の如し

(単位：円)

資 産 之 部		負 債 之 部	
未払込株金	3,600,000.00	株金	11,000,000.00
土地建設物及付属物件	1,511,859.11	法定積立金	227,800.00
機械器具諸装置及什器	2,956,458.99	別途積立金	754,700.00
製品製糸原料其他工場仕掛品	6,787,233.33	職工奨励基金	8,419.52
原動保全部勘定	37,150.25	宮部工業奨励基金	10,000.00
掛売金	1,656,961.93	退職基金	37,991.91
受取手形	584,580.83	支払手形	3,159,923.70
職工貸金	798.86	掛買金	635,727.88
仮払金	363,552.31	未納消費税	52,731.42
供託金	60,135.00	仮受金	113,739.76
有価証券	23,993.95	借入証券	53,300.00
銀行預金及振替貯金	232,914.79	借入金	156,306.15
金銀	2,802.24	未払金	151,790.63
		社員職工積立金	83,721.90
		未払配当金	3,964.21
		前期繰越金	373,390.56
		当期利益金	985,933.96
合計	17,809,441.63	合計	17,809,441.63

## 利益処分案

金 九拾八萬五千九百三拾三円九拾六銭 当期利益金  
同 三拾七萬三千三百九拾円五拾六銭 前期繰越金  
計 金 百三拾五萬九千三百<sup>にじゅう</sup>廿四円五拾貳銭

内

金 五萬貳千貳百円也 法定積立金  
同 拾萬五千參百円也 別途積立金  
同 六萬貳千八円〇九銭也 使用人老衰退職恩給傷病扶助基金  
同 五萬円也 役員賞与金  
同 <sup>さんじゅう</sup>卅參萬九千參百<sup>にじゅう</sup>廿四円也 株主配当金（年一割二分）  
<sup>ただし</sup>但、甲種株式一株に付金參円、乙種一株に付貳円、甲種第一新株一株に付金五拾八  
銭、乙種第一新株五拾貳、第二新株壹円六拾銭ノ割  
同 八萬四千八百四拾円也 特別配当（年三分）  
<sup>ただし</sup>但、甲種株式一株に付七拾五銭、乙種株式五拾銭、甲種第一新株一株に付拾四銭六  
厘、乙種第一新株拾貳銭五厘、第二新株四拾銭  
同 六拾六萬五千六百五拾六円四拾參銭九厘也 後期繰越金  
<sup>ただし</sup>但、当期利益金の<sup>ほか</sup>外固定財産償却金に金八拾萬円を、原料製品減下償却金（原文  
ママ。正しくは“減価償却金”か）に貳拾萬円を計上し居れり。

## 大日本塩業株式会社（原書 P153～158）

設立 明治三十六年九月

目的 塩及コークス製造販売及付屬業一切

資本金 四百九拾五萬円也 払込二百<sup>にじゅう</sup>廿壹萬九千九百五拾壹円五拾銭

## 重役の氏名

取締役社長	藤田謙一	取締役	今西林三郎
取締役	濱田正稲	同	井田亦吉
同	長崎英造	同	松原清三
同	青木一葉	監査役	渡辺嘉一

## 沿革及現況

同社は明治三十六年、支那満州<sup>ふぼん</sup>富源開発の目的を以て関西実業家を中心として資本金四百九拾五萬円の株式会社を組織し、製塩事業及コークス製造販売を目的とし、支那関東州塩田に壹百七十余萬円を投じ、<sup>じらい</sup>尔来十有四年間（原文ママ。正しくは“十有余年間”か）之れが発展に努力し来りしが、払込資本の九割を塩田及土地、建物、機械、什器等に固定せ

しめ居る結果、収益容易に挙らず、殊に時局以来船舶不足の影響として自然運賃の暴騰を告げ、且銀塊相場奔騰の為生産費の増加を来し、収益従て減少し、現在の俛に放置し能はざるやの状態に陥れり。

之れより先、鈴木商店にては満州に製塩業を経営し居りしも、大日本塩業会社の為め十分驥足を伸ばし能はざるを遺憾とし、塩業政策上之が買収の必要を認め居りしが、会社の状態前記の如くなるを以て昨五年夏期、同社の中心たる島徳蔵氏一派より持株の大部分を譲受け、総株数の三分の二を所有し、此処に同社の実権を握り、漸く年来の宿志を貫徹するに至れり。

而して、同店は本社の業績に鑑み改善の急務なるを認め、研究の結果、台湾塩業株式会社と合併することとし、両者の資本合計七百九拾五萬円なるを四百萬円の払込済に切り下げ、既に之れが決議を了へ、目下手続き中なり。

而して、合併後に於ける同社は製造上に一大改良を施す事とし、欧州先進国の製法に則り、従来天日製塩法なりしを「ヴァキユーム式」真空製塩法を採用して品質の優良を図ると同時に、従来得ること能はざりし副産物、即ち塩化加里、塩酸加里、塩化「カルシウム」等の化学薬品を製出する計画を樹て、既に夫々機械の注文を発し居るを以て将来は頗る有望の一大事業たるに至るべし。尚、目下青島に塩田開設の計画中なりと云ふ。

会社の自 大正五年四月 至 同六年三月 決算左の如し

(単位：百万円)

資 産 之 部		負 債 之 部	
未払込資本金	2,219,951.50	資本金	4,950,000.00
土地建物機械什器	298,390.52	法定積立金	85,500.00
関東州塩田	1,713,036.90	未払配当	630.00
有価証券	332,568.80	取引保証金	3,000.00
受取手形	333,122.75	社員積立金	6,238.56
保証金	275,780.00	借入有価証券	251,000.00
製品及貯蔵品	224,202.71	支払手形及諸借入金	307,571.75
売掛金	134,464.91	裏書割引手形	89,701.04
貸付金	37,851.35	未納塩代	412,228.28
仮払金	41,773.78	仮受金	5,915.00
未収入金	5,738.80	未払金	35,499.69
工事費	3,327.79	前期繰越金	9,984.76
銀行預金	547,902.44	当期純益金	22,222.65
金銀在高	11,379.73		
合計金	6,179,491.98	合計金	6,179,491.98

## 利益分配

金 貳萬貳千二百<sup>にじゅう</sup>廿二円六拾五錢也 当期純益金  
同 九千九百八拾四円七拾六錢也 前期繰越金  
合計 金 參萬貳千貳百〇七円四拾壹錢也

## 内

金 貳千貳百円也 法定積立金  
金 貳萬九千九百七円四拾壹錢也 後期繰越金

臺灣塩業株式会社 東京市麴町区有楽町一丁目一番地 (原書 P158~160)

設立 明治四十二年三月

資本金 參百萬円也 全額払込済

目的 臺灣塩其他食塩製造販売及製菓並に化学工業

## 重役氏名

専務取締役	藤田謙一	取締役	花井畠三郎
取締役	青木一葉	同	三輪喜兵衛
同	伊勢村鳳次	同	川合良男
同	平高富太郎 (原文ママ。正しくは“寅太郎”)	監査役	宇佐美薫次
監査役	加藤左衛門	同	太田清蔵

## 沿革及現状

同社は元東洋塩業株式会社の<sup>へんたい</sup>変体にして、曾て名古屋市に経営しつつありし小栗銀行の破綻暴露するに及んで、銀行預金者の損失を補填する為め同社株券を以て割当て充当したるものにして、営業権買取価格貳百五拾貳萬六千余円の多額を計上しあるも単に台湾塩移入特許権の見積額にして、営業状況は<sup>とかく</sup>兎に角毎期年一分五厘の配当を為し、第八期 (本年三月) 決算は五万五千九百〇参円六拾七錢の利益金の内二千八百〇〇円を積立金に、二千八百円を別途積立金に、三千五百円を重役賞与金に、千五百円を使用人退職手当基金として、残金四萬五千参百参円六拾七錢に、前期繰越金三千四百五拾貳円四拾壹錢、合計四萬八千七百五拾貳円八錢の内四萬五千円を株主配当金 (一株七拾五錢) に充て、後期に三千七百五拾貳円八錢を繰越したるが、同社が第五期決算に於て壹萬三千余円の繰越ありたるも、現在は前記の如く三千七百余円に減少するに至りしは確かに<sup>その</sup>其不成績を示せり。

尚、同社は大正四年七月、日本塩業株式会社 (原文ママ。正しくは“大日本塩業株式会社”) と<sup>きょうしゅう</sup>協商成立し、藤田専務日本塩業の重役となり、日本塩業より島及篠本の両氏本社の重役となり、従来競争の不利益を悟りたる結果、相互の利益を<sup>その</sup>図り居るも、由来両社共其実権鈴木商店にありて、約各三分の二の持株あり。



今回、時局の推移に伴い競争者たるべき朝鮮官営製塩の一手販売権獲得と共に植民地の製塩販売権を一手に掌握せるを機会に右両社を合併し、以て業礎の確立を謀り大々的發展を期待しつつあり。

ただし、上半期決算報告省略す

東洋燐寸株式会社 神戸市京町八拾壹番（原書 P161～165）

設立 大正五年六月

目的 燐寸製造販売

資本金 四百萬円也 払込金額參百萬円也

重役の氏名

取締役社長	瀧川辨三	専務取締役	瀧川儀作
常務取締役	瀧川英一	取締役	鈴木岩次郎（原文ママ。正しくは“岩治郎”）
取締役	窪田平吉	同	西川文蔵
監査役	吳 錦堂		

会社の沿革

同社の前身は瀧川辨三氏一派の経営たりしが、昨年六月以来燐寸界の旺盛なるを看取したる鈴木商店は燐寸輸出の大計画を目論見、日本燐寸、良燧社、瀧川燐寸等の有力会社と対抗すべく、市内個人経営工場の統一を図る目的を以て之が買収に着手し、夫々交渉を開始せしが、一方瀧川系統に於ても自衛上之に対抗策を講じ、直に良燧社、瀧川燐寸の両者合同し資本金貳百萬円の株式会社となせり。

然るに、其後局面一転して鈴木商店との妥協成立を告げ、更に資本金貳百萬円を増加し、合計四百萬円の株式会社組織となし、鈴木商店にて貳百萬円を引受け昨五年六月、会社を創立して東洋燐寸株式会社と称せり。

蓋し、日本燐寸と対立して斯界を風靡せるは、一面三井、鈴木両系の対抗と見るを得べし。而して、製品は同社の販売部により処理せられ、尚同社製品以外個人商店の製品をも取扱ひ居れり。

同社としては所謂創業期に属し、且原料市価の激変と船腹不足の影響を受け、予期の成績を挙げ得ざりし由なるも、多年の根柢を有する瀧川燐寸の信用と増資後の豊富なる資力と相俟って将来相当の發展を見るに至るべし。

本年上半期の於ける決算左の如し

(単位:円)

資 産 之 部		負 債 之 部	
払未済株金	1,000,000.00	株金	4,000,000.00
固定資本	1,336,244.51	法定積立金	15,000.00
有価証券	26,200.00	保証金	54,860.62
預金並に現金	103,936.49	掛買勘定	175,396.65
仮出金	3,909.92	未払金	11,701.64
掛売勘定	105,290.17	支払手形	255,180.00
製品並に半製品	865,908.77	前期繰越金	4,461.41
原料品	1,146,430.89	当期利益金	128,800.45
修繕材料	6,974.09		
受取手形	50,505.93		
合計	4,645,400.78	合計	4,645,400.78

損益勘定

金 三百五拾八萬二千八百〇五円参銭也 総益金  
 金 三百四拾五萬四千〇四円五拾七銭也 総損金  
 差引 金 拾貳萬八千八百円四拾五銭也

内

金 四萬八十七円三拾三銭也 定款<sup>にじゅう</sup>廿七条ニヨリ固定資本償却  
 再差引 金 八萬八千七百拾参円拾貳銭 当期純益金

利益金処分

金 八萬八千七百拾参円拾貳銭 当期純益金  
 同 四千四百六拾壹円四拾貳銭 前期繰越金  
 計 金 九萬参千七百拾四円五拾四銭

内

金 四千五百円也 法定積立金  
 同 八千八百円也 役員賞与金  
 同 七萬九千八百七拾四円五拾四銭 後期繰越金

日本セルロイド人造絹糸株式会社 兵庫県揖保郡網干町（原書 P165～169）

設立 明治四十一年三月

目的 セルロイド、人造絹糸化学工業品及火薬類の製造販売

資本金 壹百貳拾萬円也 全額払込済

重役の氏名左の如し

取締役社長 辻村楠造 取締役 鈴木岩次郎（原文ママ。正しくは“岩治郎”）

取締役 各務幸一郎 監査役 田中常德

監査役 松田茂太郎

沿革及現況

同社は創立以来営業更に振るはず、每期欠損を累加し経営困難を極め、一時非常の窮状に陥り、幾多の波瀾、曲折を経たるが、欧州戦乱の余慶により大正四年二月以来露国政府より二回の火薬製造注文を引受けたる結果多大の収益を挙げ、従来衰頽せる社運を挽回し、大正五年八月決算に於て七拾八萬四千五百拾貳円余の利益を収め、前期繰越欠損金四拾參萬三千九百四拾四円余と拾貳萬円の固定資本を償却し、株主に年一割の配当を為し、尚拾貳萬五千五百六拾七円余の剰余金を後期繰越となし、社運漸く復活の曙光を呈するに至れり。

殊に火薬製造に関しては、充分の経験と設備を完成し得たるを以て、一朝有事の際は軍事上重要な工場となりしは事実なりとす。

而して、露国政府注文の火薬は本年二月廿四日を以て発送を了り、尔来露国の政変頻々たると代金の受授困難なる関係上、遂に同政府との交渉を打切り、残品を支那、暹羅等へ売却し全部結了せしを以て、予て「セルロイド」製造の兼営を出願し居りしも、兼営は危険なりとの理由の下に不許可となり、止む無く「セルロイド」専門となれり。

其結果、設備変更等の為め操業日数僅少なりし為め、本年八月決算に於て拾貳萬九千円余の欠損となりしも、「セルロイド」業の現況は非常の活躍を呈し、市価七八倍乃至十倍位に達し、同社が新たに同品の供給を開始するも、之を海外に輸出する時は何等市場に影響せざるのみならず、海外市場は一般に供給不足を告げ居る状態なれば、戦時中は相当の業績を挙げ得るは敢て難事に非ざるべし。

同社の自 大正六年三月 至 同年八月決算左の如し

(単位：円)

資 産 之 部		負 債 之 部	
土地及建物	923,555.00	資本金	1,200,000.00
電路水道軌道	213,735.00	社債	600,000.00
機械 器具 什器	1,418,964.00	借入金	510,289.00
貯蔵物品	212,856.00	法定積立金	50,000.00
仮出金	13,864.00	職工積立金	707.00
未収入金	16,997.00	職員積立金	1,730.00
売掛金	32,371.00	未払金	78,324.00
銀行預金	65,804.00	支払手形	386,527.00
現金	505.00	未払利息	107,860.00
別段預金	450.00	未払配当金	450.00
製品	79,175.00	前期繰越金	227,809.00
仕掛品	56,406.00		
当期欠損金	129,000.00		
合計	3,163,698.00	合計	3,163,698.00

損益決算

金 拾貳萬九千円也 当期損失金  
 同 貳拾貳萬七千円也 前期繰越金  
 差引 金 九萬八千八百四円也

内

金 參萬六千円也 配当金 (年六分)  
 同 六萬貳千八百八円四拾五銭 後期繰越金

廣島瓦斯電軌株式会社 廣島市大手町三丁目 (原書 P169~174)

設立 明治四十二年十月

目的 瓦斯電燈及運輸業

資本金 六百萬円也 払込額二百八拾五萬円也

重役氏名

取締役社長	藤田謙一	専務取締役	松浦泰次郎
常務取締役	岡 謹一郎	取締役	風間八左衛門
取締役	加藤多市	同	澤原亮吉
同	三宅兼一	同	井田亦吉

同	石橋為之助	同	井原外助
監査役	藤山安次	監査役	島本幸助
同	松本喜代造	同	西村和平
同	渡邊栄次	同	阿部市三郎

#### 沿革及現況

同社は元廣島瓦斯会社（資本參百萬円）と廣島電気軌道会社（資本參百萬円）と大正三年七月廿六日を以て合併したるものにして、両社共鈴木商店が株主関係を有し来りしが、電気軌道会社の将来は益々大資本を要する事となり、金融関係上長く現状を維持するの不可なるを認め、同社の経営を鈴木商店へ委任することとなり、其結果瓦斯会社へ合併せるものなり。

合併と同時に重役を改選して、全然鈴木商店の手に経営を移せり。今後の会社は相当の活況を呈すべく、従て好望を以て目され居れり。

同社の大正六年九月十日現在決算報告左の如し

(単位：円)

資 産 之 部		負 債 之 部	
未払込株金	3,150,000.00	資本金	6,000,000.00
瓦斯事業興業費	1,580,245.00	法定積立金	58,357.00
電気事業興業費	2,139,104.00	別途積立金	100,000.00
貯蔵品	103,962.00	借入金	470,000.00
諸売上金	18,157.00	支払手形	315,000.00
瓦斯売上金	26,637.00	職員身元保証金	3,112.00
未収入金	760.00	契約保証金	5,472.00
有価証券	4,740.00	未払金	34,162.00
仮出金	3,969.00	未払配当金	5,387.00
金銀勘定	76,934.00	未払報償金	1,755.00
		仮受金	4,443.00
		報償金	1,179.00
		瓦斯会社繰越金	6,894.00
		電気会社 同上	2,035.00
		瓦斯会社利益金	9,603.00
		電気会社 同上	37,287.00
		自七月廿一日 至九月卅日純益	49,819.00
合計	7,104,508.00	合計	7,104,508.00

自 大正六年七月<sup>にじゅう</sup>廿一日 至 同年九月<sup>さんじゅう</sup>廿日 損益計算

金 四萬九千八百拾九円也 純益金  
金 六千八百九拾参円也 瓦斯会社繰越金  
金 貳千参拾五円也 電気会社 同上  
合計 金 五萬八千七百四拾八円也

#### 利益処分

金 貳千五百七拾参円也 法定準備積立金  
金 七百五拾円也 賞与金  
金 四萬六千参百八拾円也 配当金（年九朱）  
金 九千〇四拾四円也 後期繰越金

東城製鉄株式会社 廣島県下<sup>ひま</sup>比婆郡東城町（原書 P173～174）

設立 大正六年八月

目的 製鉄業

資本金 拾萬円也 払込済

#### 重役の氏名

取締役 野島周次郎 取締役 藤原長次  
同 田宮嘉平 同 小松重喜  
監査役 松島 誠 同 野島彌太郎  
同 <sup>よりおか</sup>依岡省輔

営業所 大阪府西成郡<sup>ひまじま</sup>禰島村字赤須

#### 沿革 現況

会社は山陽製鉄株式会社の別動隊、鈴木商店一派に<sup>よ</sup>依り大正六年八月設立せられたるものなり。主として廣島県下<sup>ひま</sup>比婆郡東城町の山林七千余町歩に存在する鉄滓<sup>てつさい</sup>を原料とし製鉄を目的とするものにして、原料は無尽蔵にして近かく製煉事業を開始する予定なり。

## 金融状態（原書 P175～182）

凡そ事業の何たるを問はず、金融の円滑を欠く時は恰も人身に於ける血液の循環不良なるが如く、忽ち支障破綻を生ずるに至るべきは論を俟ざる所なり。

是を鈴木商店の現状に視るに、直接事業及分身各会社の年製産額は約壹億五千萬円内外、輸出入及内地売買約参億萬円（原文ママ。正しくは“参億円”か）内外に達し、之に要せる投下資本は正に壹億貳百萬円を計上し、負債総額貳千八百貳拾萬円、差引七千四百萬円は本年上半期決算に於ける同店の正味身代と観るを得べし。

## 資産負債内訳左の通り

### 資産之部（別紙事業総覧参照）

#### 直営事業

固定資本 八百五拾六萬円内外

運転資本 参千萬円内外

#### 分身会社

固定資本 壹千〇七拾八萬九千円内外

運転資本 参千七百五拾七萬四千円内外

#### 関係会社

投資額 壹千貳拾四萬九千円内外（払込株金額）

其他各種投資 金 五百萬円内外

合計 金 壹億貳百拾七萬貳千円内外

### 負債の部

#### 直営事業

支払手形 七百萬円内外

買掛其他未払勘定 参百萬円内外

#### 分身会社

支払手形 壹千貳百七拾九萬五千円内外

買掛及未払勘定 四百貳拾八萬壹千円内外

分身会社鈴木系統外株主投資額 金 壹百拾参萬七千円内外

合計 金 貳千八百貳拾壹萬參千円内外

差引正味身代 金 七千參百九拾六萬円内外

但し、關係会社投資金壹千貳拾四萬九千円内外は事実上の払込金額なるを以て、之を十二月中旬株式市価に換算する時は其の總額壹千六百四拾參萬余円に達せり。故に該株金のプレミアム六百拾九萬円内外を同店の利益と計算する時は、正に八千萬円と稱するを得べし。

同店正味身代は前記の如く六年上半期に於て正に七千四百萬円に達せるが、之れ実に急激の膨張にして、即ち大正三年末には未だ正味貳千萬円内外と評され居りしに、同年七月欧州戦乱以来前述の如く<sup>れんごうこく</sup>聯合國より軍需品の注文を始めとし、從來交戦国より多く供給を受け居りし支那、南洋、印度、豪州方面より代用品の需要<sup>にわか</sup>俄に激増し、一時戦乱の打撃を受けし本邦經濟界は茲に<sup>こころ</sup>千古未曾有の活況を呈し、生産力は注文の半<sup>なかば</sup>にだも<sup>あた</sup>応ずる能はざる状態にて、四年下半期より五年及六年度上半期迄は最も旺盛を極めたり。

此趨勢を洞察せる鈴木商店は大々的積極策を採り、<sup>あらた</sup>新に各種の事業を經營し、或は既設事業を拡張する等<sup>ひたすら</sup>只管戦時利益の獲得に全力を傾注せしが、事業の全部が殆ど予想に近き好成績を挙げ、<sup>なかんずく</sup>就中軍需用食料品、銅、亜鉛の輸出、製鋼業、造船業等は最も優秀の成績を挙げ居れり。

蓋し、造船業は昨五年度よりの經營に係り、昨今拡張工事も漸く<sup>しゅんせい</sup>竣成に近づきつつあるを以て、完成の<sup>あかつき</sup>暁は非常の収益を挙げ得るは疑を容れざる所なるべし。

而して、戦時利益は四、五兩年を通じ正に四千萬円内外、六年度上半期約壹千五百萬円内外の純益を挙げ、戦争<sup>なりきん</sup>成金の<sup>そうそう</sup>錚々たるものと稱せらるるに至れり。

尚、分身会社たる日本商業会社は綿糸布の思惑<sup>ないし</sup>売買にて約七八百萬円乃至壹千萬円内外の損失に<sup>おわ</sup>了るべき模様なれば、昨年<sup>おおい</sup>に比し大に〇〇利益の減少を見るべきも、一面下半期に於ける各造船所の利益は莫大の額に達する<sup>はず</sup>筈なるを以て、結局<sup>この</sup>此方面の利益のみにて優に補填し得べき見込なり。

今上半期に於ける収益割合を見るに左の如し

貿易及び内地売買利益金 九百萬円内外

<sup>ただし</sup>但、大正六年上半期の扱高約壹億五千萬円と見積り、利益割合は最も市場好況の折柄なりしを以て、優に七八分平均位の見込なるも、之を<sup>うちわ</sup>内輪に見て六分平均に見積れり。



直営事業製造利益金 百五拾萬円内外

但し、同上期間内の製産高壺千八百五拾萬円位と見積り、時に魚油、大豆油、薄荷等非常の好況にて相当市価の騰貴を来し、従て平均利益は優に一割乃至一割二分位は確実に取得せりと推測せらるるも、内輪に見て八分平均に見積れり。

分身会社総益金 参百八拾五萬円内外

関係会社配当所持金 六拾五萬円内外

合計 金 壺千五百萬円内外

而して、其金融状態は前記の如く七百餘萬円は買掛其他未払勘定にて運転し、約貳千萬円内外は手形にて金融を計り、以て運転資金に供し居れり。内壺千萬円乃至壺千貳百萬円内外は主として神戸金融市場にて調達し、残額七八百萬円乃至壺千萬円内外は大阪及東京の両市場にて融通を図り、就中台湾銀行神戸及東京支店とは密接の関係を有し、特に相当多額の金融を受け居れるが如く、各銀行共相当の信用を払ひ居れり。

蓋し、同店の金融は本店に於て統一し、直営事業は勿論、分身会社と虽も絶対に本店の指揮按配を受くる事となり居り、以て資金運用の妙を極め居れるが、是れ即ち同店が今日の尨大を成して、尚且つ一糸乱れざる経営を為し得る所以なるべしと観察せらる。

然れども、同店の身代七千四百萬円内外は全部固定及運転資本に投じ、尚且参千萬円の融通を受け居る状態に鑑みる時は、將に極度に拡張せるかの観無き能はず。

故に、一朝財界の急変に際し金融の逼迫を来さんか、仮令信用絶大なるものありと虽も相当の制限を加へらるるは免がれざる所なるべく、従て巨額の資金を融通に仰げる同店は一大苦痛を生ずべきは蓋し想像するに難からざる所たると同時に、経営者が絶へず至大の注意と周到なる用意とを要すべきや言を俟ざる也。

## 取引銀行

台湾、正金、第一、三井、三菱、住友、三四、浪速、加島各支店、其他各銀行及びビルブローカー銀行等に取り引ありて、何れも対行信用厚し。

## 要之 (要約すれば)

現状に徹し何等警戒の要無きも、最近の事業比較的多きと極度の拡張を為せる点とは多少注意を払ふの要ありと認む。